熊本県文化財調査報告　第211集

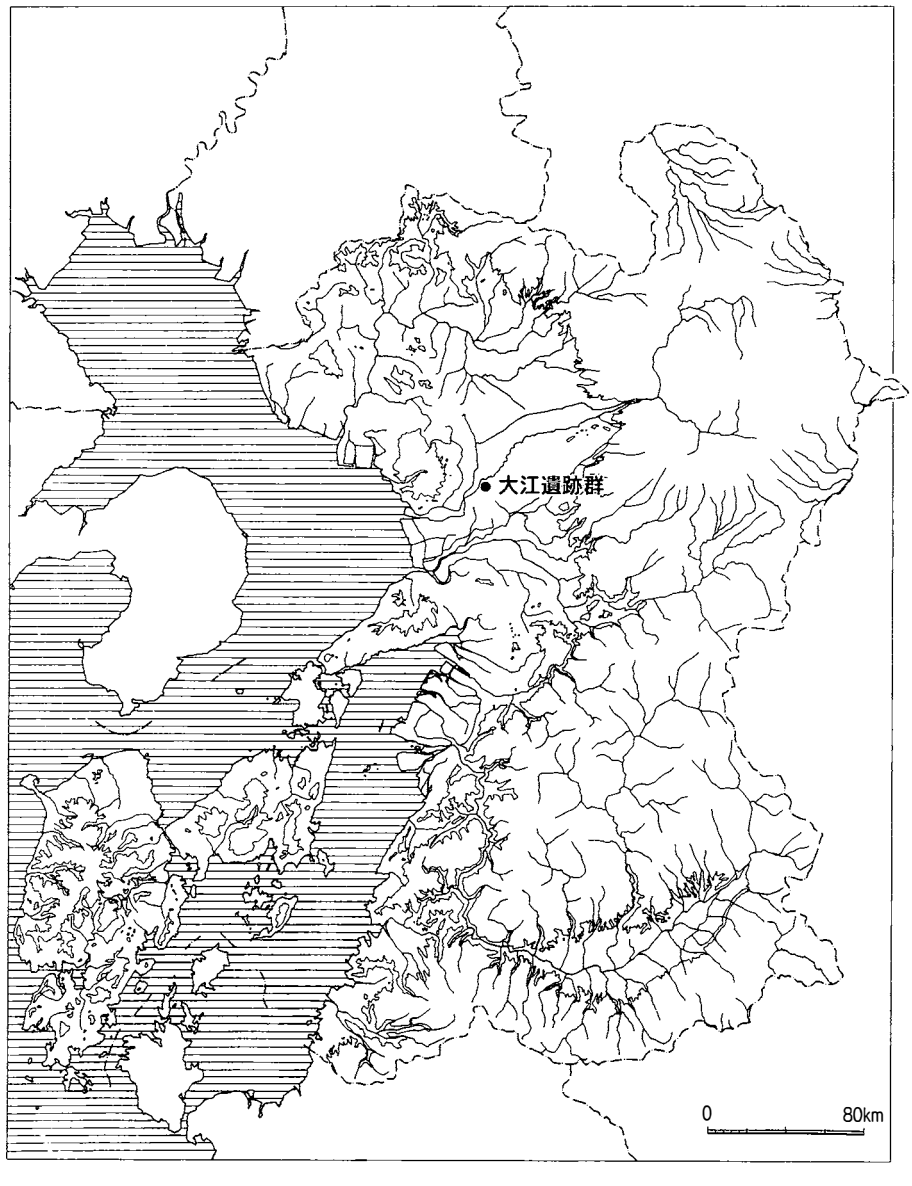
大江遺跡群

２００２

熊本県教育委員会

大江遺跡群

県営古庭坊団地建て替えに伴う埋蔵文化財発掘調査



序　文

熊本県教育委員会では、県土木部の依頼を受け、県営住宅建て替えに伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

熊本市中心部でのやや規模の大きい調査でありましたが、縄文時代の遺物を始め、古代の住居跡や溝が多く残存していることが分かりました。

現地調査におきましては、古庭坊団地自治会の方々をはじめ県土木部住宅課の御協力により、円滑な調査が遂行できました。報告書の刊行に当たり、まずもって関係各位の皆様にお礼申し上げます。

この報告書が、埋蔵文化財及び文化財の保護について知る契機として活用されることを願ってやみません。

末尾となりましたが、寒い中、発掘作業に従事していただいた作業員の皆さま並びに御指導御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成15年３月31日

熊本県教育委員会
教育長　田中力男

例　　言

1　本書は、県営古庭坊団地建て替えに伴い実施した、大江遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は熊本県土木部の依頼を受けて、熊本県教育委員会が行った。

3　現地調査は、平成13年度に実施し、木村元浩が担当した。

4　現地での図面作成及び写真撮影は、担当者及び作業員で分担した。

5　報告書作成業務は、平成１４年度に熊本県文化財資料室で実施した。出土遺物の整理作業は、主として水本壽美子、木村雅子が担当し、作図の整理作業を前田佳代子、古閑満代、田中知恵美、佐藤淳子、金子美代子が行った。

6　出土遺物の実測は、整理作業担当者のほか、株式会社九州文化財研究所に委託しておこなった。

7　出土遺物の写真撮影及び遺構・遺物写真の焼き付けは、文化課臨時職員村田百合子が行った。

8　本書の執筆および編集は、木村が行った。

9　整理後の遺物は、熊本県文化財資料室（熊本市渡鹿３丁目15－12）に保管されている。

凡　　例

1　方位は、磁北を示す。

2　遺構図におけるスクリーントーン等の表記法は主として、硬化面・焼土・焼土ブロック・炭などの部分に使用したが、何を表すのかについてはその横に記した。

3　土器の色調については、農林水産省水産技術会議事務局　監修　『新版　標準土色帖』（1996）に準拠した。

本　文　目　次

序　文
例言・凡例
口　絵
本文目次
挿図目次
図版目次
写真図版目次

第Ⅰ章　調査の概要
第１節　調査のきっかけ ……1
第２節　調査方法と経過 ……1
1　調査区 ……1
2　調査方法 ……1
3　調査期間及び経過 ……1
第３節　発掘調査の組織 ……2
1　調査体制 ……2
2　整理の組織 ……2
第Ⅱ章　遺跡の概要
第１節　位置と環境 ……5
第Ⅲ章　調査成果
第１節　基本層序 ……13
第２節　縄文時代の遺物 ……15
1　土器 ……15
2　石器 ……15
第３節　古代の遺構とその遺物
1　竪穴住居跡 ……15
2　溝 ……17
3　土抗 ……18
第４節　近世以降の遺構とその遺物 ……26
1　溝 ……26
第５節　不明遺構 ……34

第Ⅳ章　まとめ

抄　録

図版目次

第１図 …… 3
第２図
第３図
第４図
第５図 ……14
第６図
第７図 ……19
第８図
第９図
第10図 ……22
第11図 ……23
第12図
第13図
第14図 １・２号溝実測図
第15図 ……29
第16図 柱穴検出全体図……30
第17図
第18図 第５層検出柱穴位置図 ……32
第19図 第
第20図 貝殻柱穴 ……34

表目次

第１表 遺跡地名表 …… 7
第２表 掲載遺物（土器）観察表……27

写真図版目次

図１ Ａ区調査区……39
図 Ｂ区調査区（北半部）……39
図 Ｂ区調査区（南半部）……39
図４ １号住居跡検出 ……40
図 ５・６号住居跡 完掘状況 ……40
図 ９号住居跡完掘状況 ……40
図７ 10号住居跡検出状況
図 １溝完掘状況 ……41
図 ３溝完掘状況 ……41
図10 ２溝完掘状況 ……42
図11 ４溝完掘状況 ……42
図 ５溝完掘状況 ……43
図 １号土抗完掘状況 ……43
図14 貝殻柱穴２検出状況 ……44
図15 貝殻柱穴１断面図
図 ３層上面検出柱穴群 ……45
図 Ａ区土層断面図
図 縄文土器 ……46
図 石 鏃……46
図20 土師 ……46
図21 ……47
図22 ……47
図23 ……47
図
図 ……48
図26 須恵器蓋……48
図27 ……49
図28
図
図30 ……50
図31 メンコ……50
図32 ……50
図33 古 銭……51
図34 ……51
図３
図
図 ……52
図38 調査風景……52

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査のきっかけ

戦後まもなく、県内でも早い時期の県営団地の一つとして建設されたのが古庭坊団地である。すでに50数年を経ており建て替えが必要となったことを契機とする。

当地区は、周知の埋蔵文化財包蔵地である大江遺跡群に該当していた。既存の建物などによりすでに埋蔵文化財が破壊されている可能性が高いものの、施設のない区域では、埋蔵文化財の残存は高いと予想された。

県土木部住宅課から文化財調査の依頼を受けた県教育庁文化課は、平成13年7月5日から13日まで確認調査を実施した。その結果、古代の遺構や土器、縄文時代の土器などが出土し、埋蔵文化財の残存が確認された。平成13年7月17日、文化課より住宅課へ確認調査の結果が通知されている。これを受けて、文化課への本格調査の依頼がなされた。文化課では、平成13年11月12日から平成14年2月19日までの約3ヶ月間現地調査を行った。

第２節　調査方法と経過

①　調査区（第１図）

調査地は、すでに更地となっていた。これは平成１３年当初にすでに解体工事を終えていたからである。すなわち、調査前は礫などで埋められていた。よって、表土剥ぎにも相当の時間を要した。

まず、２つの調査区を設定し、Ａ区・Ｂ区とした。Ａ区は、新設される進入路部分であり、Ｂ区は新築される建物部分である。調査は、Ａ区より開始し、同時並行でＢ区の表土剥ぎをおこなった。Ｂ区については、排土置き場の都合上、南と北に２分割して調査することとし、北半部を先行した。

②　調査方法

重機により表土剥ぎを行う。攪乱が著しく、攪乱部分と本来の地層が残っている部分との境界も相当の凹凸があるため、慎重に実施した。

次にジョレン・移植ゴテ・スコップによる清掃及び遺構検出作業を行う。攪乱部分では、６層での遺構検出作業を行う。本来の地層が残存している部分については、まず４層上面で検出作業を行う。土層ごとに順次掘り下げながら遺構検出に努める。最終の遺構検出面は６層で、ここで確認できた遺構も少なくない。検出した遺構は、土層観察用のあぜを残し掘削する。上部より出土する遺物は、遺構内一括遺物として取り上げる。このような状態で完掘できたものは、覆土の堆積状況を示す土層断面図及び必要に応じて土層断面写真の撮影を行う。土層観察用のあぜを取り除いた後、平面図作成など実測作業を行う。

また、公共座標に沿った基準杭を設定し、10m×10mを１つのグリッドの基本（基本グリッド）とした。検出遺構・出土遺物の実測や取り上げについては、個々に判断されるが、原則として基本グリッドによった。

③　調査期間及び経過

調査経過は、以下のとおりである。

11月12日より表土剥ぎを開始。11月20日より作業員の方々と清掃作業に入る。Ｂ区の北半部で東西方向の大きな溝を確認した。12月初旬になり、南北方向の溝、また住居跡を検出し、一部掘削を開始する。Ａ区では攪乱がひどい。検出できたのは柱穴のみで、早速平板測量及び20分の１の実測を開始した。また、Ｂ区では検出遺構の掘削・実測を行う。同時に、遺物包含層である白色粘土・黒色粘土が残存している部分については掘り下げを行う。

1月に入り、検出遺構の掘削・実測を急ぐ。Ｂ区北半部の北端の調査を継続しながらも、南半部の調査に移る。北半部と同様、攪乱が多く危険防止のため、表土剥ぎ作業の間、一時調査作業を中止した。その結果、南

端は攪乱が多く、包含層の残存部分は少ないことが判明した。1月下旬より住居跡・溝を確認し、急ぎ、検出遺構の掘削・実測にかかる。2月に入り図面作成を急ぎ終盤になる。2月19日をもって調査を終了した。

第３節　発掘調査の組織

発掘調査及び報告書作成業務は、以下の体制で行った。なお、所属等は当時のものである。

１　調査体制

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　阪井大文　文化課長
　　島津義昭　教育審議員（課長補佐）

調査総括　木崎康弘　文化財調査第２係長

調査担当　木村元浩　主任学芸員

調査事務　小田信也　教育審議員（課長補佐）
　　中村幸宏　主幹（総務係長）
　　廣瀬泰之　参事
　　杉村輝彦　主事

発掘作業
　伊藤千代子　河野義勝　白石美智子　田上次敏　田上利子　塚本　静　徳永雄介　番山明子
　福田久美子　松井昭子　村上千万年　村上恵子　森　みどり　森川　護　森川征子　森田　登
　吉本清也　吉本カズコ　宮村邦子

調査指導及び協力者
　網田龍生、稲津暢洋、赤星雄一（熊本市文化財課）宮縁育夫、大丸裕武（独立行政法人森林総合研究所）
　高谷和生、水野哲郎、高田英樹、帆足俊文、野田英治、山下義満、岡本真也（熊本県教育委員会）

２　整理の組織

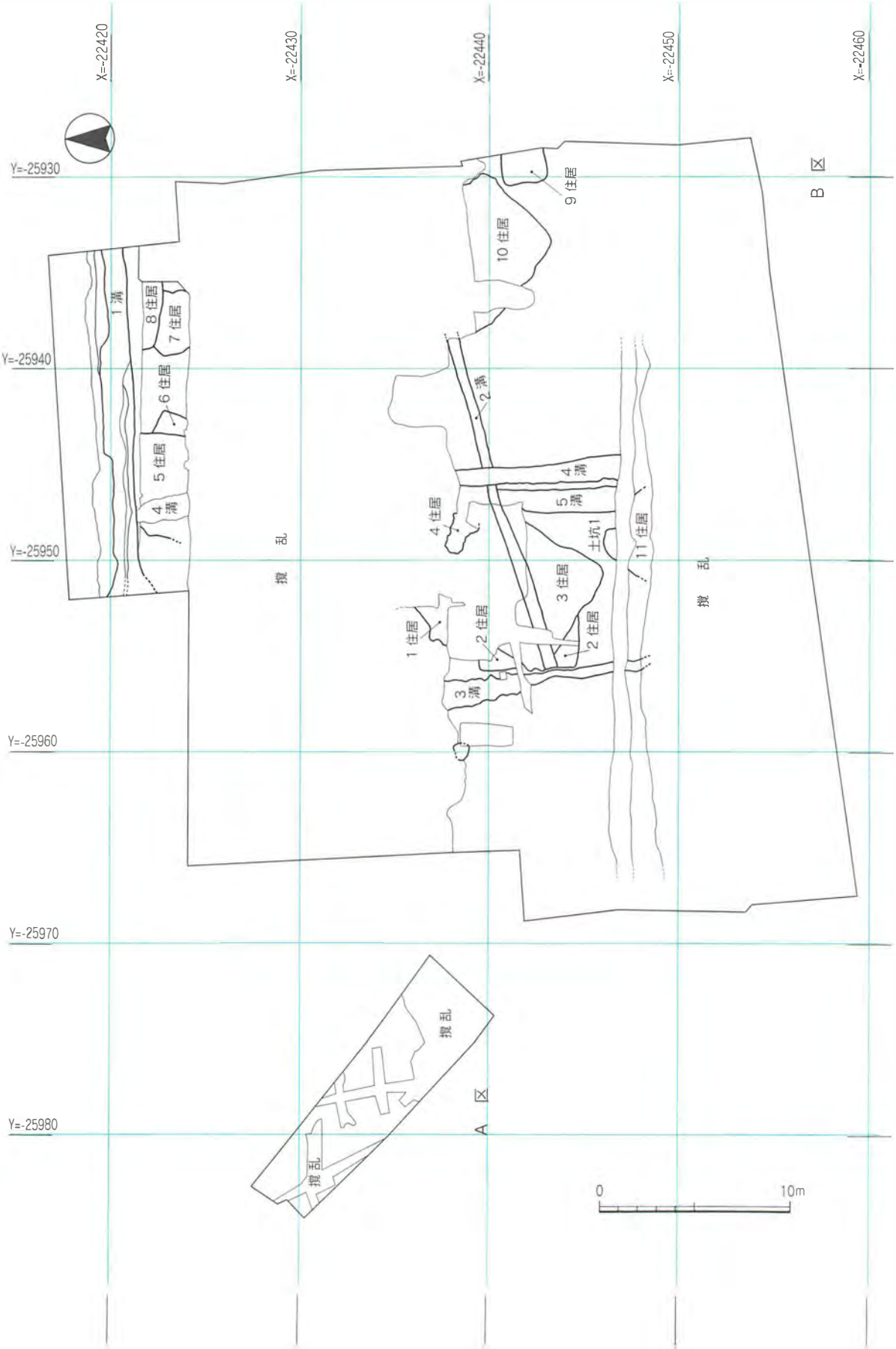
主　体　熊本県教育委員会

責任者　成瀬烈大　文化課長
　　島津義昭　教育審議員（課長補佐）

報告書担当　木村元浩　主任学芸員
　　前田佳代子　嘱託

調査事務　小田信也　教育審議員（課長補佐）
　　中村幸宏　主幹（総務係長）
　　天野寿久　主任主事
　　杉村輝彦　主事

整理作業担当
　水本壽美子　木村雅子　古閑満代　田中知恵美　佐藤淳子　金子美代子



第1図　A・B区遺構配置図

第II章　遺跡の概要

第１節　位置と環境

大江遺跡群は、熊本市中心部に存在しており、すでに共同住宅建設などに伴って、熊本市教育委員会を中心に60地点以上の本格的な発掘調査が実施されている。

この大江遺跡群は、熊本平野北側の白川下流左岸に位置する。その規模は東西・南北ともおよそ1.4kmにも及ぶ広範囲なものと考えられている。具体的には北は熊本県警察学校、南はＪＲ水前寺駅、東は託麻原小学校、そして西は県道熊本高森線（通称電車通り）まで及ぶ。

今回調査を実施したのは、大江遺跡群の南西部に当たる。調査地点のすぐ南側には慶誠高等学校、東側には大型スーパーがある。

当地の形成は、この白川の幾たびにもわたる氾濫よるところが大きいと考えられている。北東部には通称託麻原台地と呼ばれる河岸段丘の末端が存在しており、現在白川中学校が存在しているところである。

ところで、これまでの大江遺跡群の発掘調査の結果から、奈良・平安時代の集落跡が数多く見つかっており、この時期に大江遺跡群が集落として発展していた地域である考えられる。

大江遺跡群から見つかっている遺構には、住居跡・溝・水田跡・道路跡・土抗・掘立柱建物跡などがある。

また、出土遺物に瓦、円面硯、墨書土器など特徴的なものも少なくない。

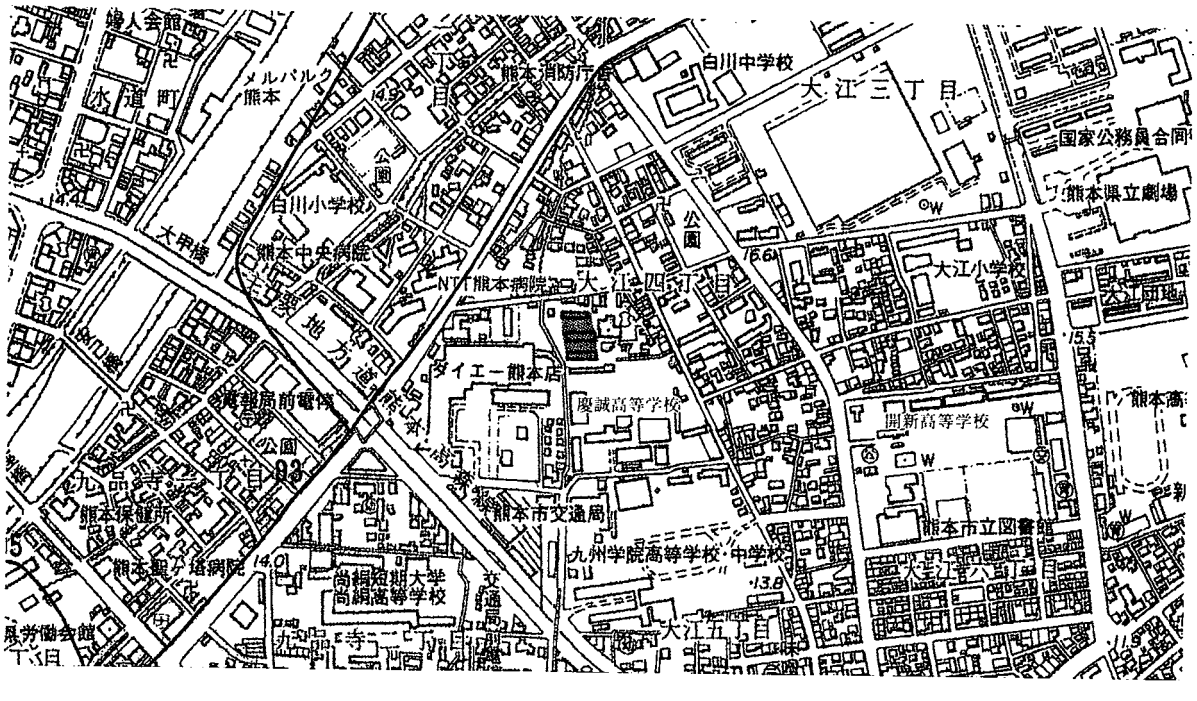
古代以外では、縄文時代の早期や晩期の土器が見られるほか、古墳時代から近世・現代にいたるまでの遺構も発見されている。

大江遺跡群の調査概要については、すでに熊本市教育委員会刊行の下記報告などで幾たびにも述べられているので、ここでは割愛したい。

(参考資料)

『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集』　平成９年度、平成11年度・12年度　　熊本市教育委員会

『大江遺跡群　II』　1993　熊本市教育委員会



第2図　調査地位置図

第3図　周辺遺跡地図

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　　代	備考
1	大江遺跡群	大江３丁目	縄文～明治	283
2	桑鶴遺跡群	和泉町桑鶴	縄～中世	026
3	瑞巌寺跡	貢町	中世	027
4	五丁中原遺跡群	貢町字馬場・三つ塚	旧石器～弥生	028
5	原口原横穴群	貢町原口原	古墳	029
6	扇田横穴群	貢町扇田	古墳	030
7	釜尾古墳	釜尾町同免	古墳	031
8	橋口古墳	釜尾町橋口	古墳	032
9	釜尾出遺跡群	釜尾町堂出	古墳	033
10	天福寺裏山古墳群	花園町柿原	古墳	034
11	坂下遺跡群	硯川町北井川谷	弥生・古墳	060
12	城下Ａ横穴群	下硯川町	古墳	061
13	坂下Ｂ横穴群	下硯川町	古墳	062
14	狩衣横穴群	下硯川町狩衣	古墳	063
15	白土	貢町白土	弥生	064
16	清水町遺跡群	清水町山室など	縄文～古墳	067
17	徳王	徳王町　清水町山室ほか	縄文～平安	068
18	亀井遺跡群	清水町亀井	縄文～中世	083
19	万石昭和団地前	清水町万石	縄～中世	084
20	楡木	清水町楡の木	縄文・弥生	085
21	岩倉山中腹	清水町兎谷	縄～中世	086
22	岩倉山山頂	清水町兎谷	縄～中世	087
23	岩倉山	清水町兎谷	旧石器～中世	088
24	楠	龍田町	縄～中世	089
25	堂ノ前遺跡群	清水町楡木・堂の前	旧石器～中世	090
26	庵ノ前	清水町兎谷・上龍田	旧石器・弥生	091
27	迫ノ上遺跡群	龍田町陣内など	縄文～平安	092
28	壱町鶴	清水町楡木一町鶴	縄～中世	093
29	吉ノ平	龍田町上立田	縄～中世	094
30	竹ノ後・芭蕉遺跡群	竜田町上立田竹の後	縄文～平安	095
31	弓削小坂横穴群	龍田町弓削小坂屋敷	古墳	096
32	弓削前畑	龍田町弓削小坂屋敷	縄～中世	097
33	弓削平ノ下Ａ	龍田町弓削平の下	縄～中世	098
34	弓削平ノ下Ｂ	龍田町弓削平の下	縄～中世	099
35	吉原	吉原町殿田	縄文～平安	100
36	片彦瀬	龍田町弓削片彦瀬	縄文	101
37	北上遺跡群	石原町平	縄文・古代	102
38	上南部	上南部町村下	縄文	103
39	供合松ノ上	上南部町	縄～中世	104
40	法王鶴	龍田町	縄文・弥生	105
41	石原町	石原町	縄～中世	106
42	石原瀬々井	石原町瀬々井	縄文	107
43	神園 桜井	長嶺町	縄～中世	108
44	神園山遺跡群	長嶺町、小山町	奈良・平安	109
45	神園田淵屋敷	小山町、長嶺町	平安・中世	110
46	託麻弓削遺跡群	弓削町	縄文	111
47	弓削廃寺跡	龍田町弓削	中世	113
48	山尻遺跡群	龍田町弓削山尻	弥生	114
49	神園山西麓	長嶺町下の山	古代	115
50	神園山城跡	長嶺町下の山	中世	116
51	正平塔（石燈籠）	小山町	中世	117
52	平山居屋敷	平山町	古代・中世	118
53	小山城跡	小山町	中世	119
54	小山上の山	小山町	縄～中世	120
55	平山石ノ本	平山町	旧石器～縄文	121
56	馬ノ水	花園町	縄文・弥生	170
57	島崎	島崎町島崎紙屋	縄文	172
58	野添平	池上町野添平	縄文～中世	177
59	花岡山・万日山遺跡群	横手町、春日町	古墳	190
60	清水原	池上町	縄文～中世	191
61	成道寺六地蔵塔（２基）	花園７丁目	中世	198
	成道寺五輪塔		中世	
	成道寺板碑（４基）		中世	
62	柿原道手古墳	花園町柿原	古墳	199
63	畑ノ原古墳群	花園町	古墳	200
64	羽山遺跡群	花園町柿原字羽山		201

第1表　遺跡地名表１

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　　代	備考
65	ジブラ墓地	花園７丁目	中世	202
66	柿原遺跡群	花園町柿原字柿原	縄文～中世	203
67	柿原馬の木	花園町	縄文～中世	204
68	柿原羽山尻	花園町	旧石器・古墳	205
69	経塚道跡群	花園町柿原字経塚	弥生・古墳	206
70	柿原宮ノ原廃寺	花園町柿原	中世	207
71	池亀	池亀町	弥生	208
72	本妙寺Ａ箱式石棺群	花園町４丁目	古墳	209
73	本妙寺Ｂ箱式石棺群	花園町４丁目	古墳	210
74	本妙寺北	花園町４丁目	古墳～中世	211
75	井芹城跡	花園町４丁目	中世	212
76	井芹	花園町5丁目	弥生	213
77	中尾丸城跡	花園町４丁目	中世	214
78	牧崎	花園町１丁目	弥生	215
79	小山田	島崎町	縄文～中世	216
80	釣耕園	島崎５丁目	江戸	217
	叢桂園	島崎５丁目	江戸	
	百梅園跡	島崎４丁目	江戸	
81	石神原	島崎町３丁目	弥生～平安	218
82	千原台遺跡群	島崎町３丁目ほか	縄文～平安	219
83	迎田	島崎町	縄文～平安	220
84	北島遺跡群	池田町４丁目	弥生～中世	221
85	熊本工大	池田町４丁目	弥生	222
86	富ノ尾古墳群	池田３丁目	古墳	223
87	富ノ尾古墳１号墳	池田３丁目	古墳	224
88	池田山伏塚遺跡群	池田２丁目、清水町高平･津浦	弥生・古墳	225
89	山伏塚	池田２丁目	中世	226
90	高平箱式石棺	清水町高平	古墳	227
91	永浦遺跡群	清水町打越、永浦	古墳・中世	228
92	稲荷山古墳	清水町打越	古墳	229
93	池田町（池田小学校）	池田町１丁目	弥生～平安	230
94	津浦一ノ谷横穴群	清水町津浦字補迫	古墳	231
95	一ノ谷	清水町津浦字中寄	古墳～平安	232
96	稗田横穴群	池田町稗田字猪迫	古墳	233
97	舟場	清水町津浦	縄文～中世	234
98	舟場山古墳	清水町津浦字船場	古墳	235
99	打越遺跡群	清水町打越	弥生・中世	236
100	打越貝塚	清水町打越	縄文	237
101	京町台遺跡群	京町	弥生～中世	238
102	寺原横穴群	京町	古墳	239
103	京町２丁目	京町２丁目	縄文～近世	240
104	伝大道寺遺跡群	京町２丁目	縄文～近世	241
105	内坪井	内坪井町	弥生	242
106	安元元年笠塔婆塔身	坪井４丁目	古代	243
	安元元年笠塔婆	坪井４丁目	古代	
107	夏目漱石内坪井旧居	内坪井４丁目	明治	244
108	藤園中学校校庭	千葉城町	弥生～平安	245
109	熊本城跡遺跡群	古城、古京、千葉城町	古墳～近世	246
110	熊本城跡	古城・古京町・千葉城町	近世	247
111	旧細川刑部邸	三の丸・古京町	近世	248
112	新馬借	新町３丁目	古墳～平安	249
113	船場町	新町２丁目、鍛冶屋町	弥生	250
114	山崎古墳	桜町	古墳	251
115	小泉八雲熊本旧居	安政町	明治	252
116	辛島町	辛島町	弥生・古墳	253
117	古町（旧唐人町）	唐人町、古町ほか	弥生～明治	254
118	戸坂	戸坂町	弥生～平安	255
119	戸坂御田尻	戸坂町	縄文～中世	256
120	吉祥寺横穴群	横手町	古墳	257
121	花岡山陸軍埋葬地	横手２丁目	明治	258
122	妙解寺細川家霊廟及び門	横手２丁目	江戸	259
	妙解寺細川家墓地	横手２丁目	江戸	
123	細川家菩提寺妙解寺跡	横手２丁目	江戸	260
124	山由雲院（春日寺）	春日３丁目	江戸	261
125	北岡神社境内古墳	春日１丁目	古墳	262
126	北岡横穴群	春日１丁目	古墳	263

遺跡地名表２

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　　代	備 考
127	石塘（白川橋）	二本木１・２丁目	弥生～中世	264
128	二本木遺跡群	二本木１・２丁目ほか	弥生～中世	265
129	古閑前	清水町亀井	縄文～中世	269
130	清水町谷口	清水町万石	旧石器～平安	270
131	万石塚坊主古墳群	清水町大字万石	古墳	271
132	松崎遺跡群	清水町松崎	弥生～平安	272
133	松崎八幡箱式石棺	清水町松崎字上屋敷	古墳	273
134	室園	清水町室園	縄文～中世	274
135	黒髪町下立田遺跡群	黒髪町	古墳～江戸	275
136	泰勝寺細川家墓所・庭園	黒髪４丁目	江戸	276
137	小峰	黒髪町小峰	縄文～平安	277
138	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	278
139	旧第五高等中学 化学実験場・表門	黒髪２丁目	明治	279
140	子飼	子飼町	縄文～中世	280
141	大江白川	大江１丁目	縄文～平安	281
142	新屋敷	新屋敷町	弥生～中世	282
143	大江義塾跡（旧徳富邸）	大江４丁目	明治	284
144	本庄（熊大病院敷地）	本荘２丁目	古墳～平安	285
145	不動院跡の六地蔵塔	九品寺４丁目	中世	286
146	本山城跡（本庄城跡）	本山町城の本	弥生～中世	287
147	世安池田	世安町池田	弥生～中世	288
148	出水国府跡	九品寺、国府、国府本町	弥生～中世	290
149	西水前寺町	水前寺１丁目	縄文～中世	291
150	国分寺跡	出水１丁目	縄文～中世	292
151	江津湖遺跡群	神水町、画図町ほか	縄文～中世	293
152	天拝山	清水町楡木	旧石器～弥生	294
153	万石乗越	清水町万石	縄～古代	295
154	万石茶山	清水町万石	縄文・弥生	296
155	秣野	龍田町上立田	縄文～平安	297
156	陳内上ノ園遺跡群	龍田町上立田	縄文～古墳	298
157	三の宮（牧鶴宮脇）	龍田町上立田	縄文	299
158	立田山山頂	黒髪町	古墳～平安	300
159	万石茶山古墳	清水町万石（通称）茶山	古墳	301
160	立田山東中腹	黒髪町	古代・中世	302
161	宇留毛浦山市営墓地	黒髪町７丁目	縄文～平安	303
162	九女グランド	黒髪町		304
163	竜田陳内遺跡群	龍田町陳内	旧石器～中世	305
164	桜山中学校校庭	黒髪町５丁目	古墳～平安	306
165	カブト山	黒髪町宇留毛字甲山	縄文	307
166	宇留毛Ａ	黒髪町６丁目	縄文	308
167	宇留毛Ｂ	黒髪町６丁目	縄文～平安	309
168	浦山第２横穴群	黒髪７丁目浦山	古墳	310
169	浦山第１横穴群	黒髪７丁目浦山	古墳	311
170	女瀬平横穴群	竜田町陣内女瀬平	古墳	312
171	長薫寺古墳	黒髪町７丁目	古墳	313
172	宇留毛小磧橋際横穴群	黒髪町７丁目	古墳	314
173	つつじヶ丘横穴群	黒髪町７丁目	古墳	315
174	宇留毛神社周辺遺跡群	黒髪町６・８丁目	古墳・中世	316
175	竜田口	龍田町、黒髪７丁目	縄文～平安	317
176	堂前畠	龍田町	縄文～平安	318
177	神園	長嶺町上西原	縄文～平安	319
178	長嶺遺跡群	長嶺町	縄文～平安	320
179	王田	上南部町王田	縄文～平安	321
180	牧鶴遺跡群	龍田町上立田	古墳	322
181	下南部	下南部町下山	縄文～古墳	323
182	平ノ山	上南部町		324
183	北小迫	御領町		325
184	南小迫	御領町	縄文～平安	326
185	八反田居屋敷	長嶺町		327
186	八反田遺跡群	長嶺町八反田	縄文・中世	328
187	長嶺南	長嶺町南居屋敷	弥生・中世	329
188	長嶺油出	長嶺町		330
189	松の窪			331
190	新南部遺跡群	新南部町	旧石器～平安	332
191	南原			333

遺跡地名表３

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　　代	備考
192	乾原・迎八反田	長嶺町乾原・迎八反田	縄文～平安	334
193	渡鹿遺跡群	渡鹿５丁目	縄文・弥生	335
194	渡鹿菅原神社境内	渡鹿６丁目		336
195	辻	渡鹿７丁目	縄文～平安	337
196	新南部西原	新南部町	縄文～平安	338
197	南平上	新大江３丁目南平上	奈良・平安	339
198	帯山遺跡群	帯山１丁目	縄文～平安	340
199	保田窪東一本松	縄文～平安		341
200	三郎塚	健軍町	縄文～平安	342
201	豪潮宝篋印塔	健軍町	中世	343
202	新外Ａ	健軍町小峰	縄文	344
203	新外Ｂ	健軍町小峰	縄文～平安	345
204	小嶺	健軍町小峰	縄文～平安	346
205	北水前寺	水前寺３丁目	奈良・平安	347
206	水前寺廃寺跡	水前寺公園	奈良・平安	348
207	水前寺廃寺塔心礎石	水前寺公園	奈良	349
208	水前寺成趣園	水前寺公園	江戸	350
209	古今伝授の間	水前寺公園	江戸	351
210	陳山廃寺跡	水前寺公園	奈良・平安	352
211	洋学校教師館	水前寺公園	明治	353
212	肥後国分寺	出水１丁目　熊野神社	奈良	354
213	神水	神水本町・出水２丁目	縄文～平安	355
214	健軍神社周辺遺跡群	健軍２丁目	旧石器～中世	357
215	健軍神社境内	健軍本町	中世	358
216	佐土原	健軍町佐土原	縄文～平安	359
217	沼山津	秋津町	弥生～平安	360
218	中山	小山町	縄文～平安	364
219	楳（梅）谷寺瓦窯跡群	小山町	奈良・平安	365
220	小山上	小山町	弥生	366
221	小山山伏塚	小山町	弥生	368
222	上黒迫	戸島町	縄文・中世	369
223	戸島京塚	戸島町	縄文～中世	370
224	戸島北向（戸島西）	戸島町	縄文・中世	371
225	葉山遺跡群	戸島町葉山	旧石器・縄文	374
226	須屋園観音堂板碑	清水町八景水谷	中世	415
227	八景水谷塔の本五輪残欠	清水町八景水谷	中世	416
228	大窪五輪塔	清水町大窪	中世	418
229	大窪高笠観音堂前板碑	清水町大窪	中世	419
230	硝酸蔵	徳王町才道	近代	420
231	野口阿弥陀堂碑群	釜尾町	中世	421
232	牛島喜楽墓	花園町柿原	江戸	422
233	西浦阿弥陀堂碑	貢町	中世	423
234	岩下御茶屋跡	貢町寺の前	近代	424
235	五丁中原阿弥陀堂板碑	貢町五丁屋敷	中世	425
236	二里木跡	龍田町上立田	近世	438
237	武蔵塚	龍田町弓削	近世	439
238	セボンサン	龍田町弓削	中世	440
239	弓削寺跡	龍田町弓削	中世	441
240	弓削薬師堂板碑	弓削町	中世	442
241	弓削山伏塚板碑	弓削町	中世	443
242	菊池家墓地	平山町	中世	444
243	北上遺跡群			445
244	岳林寺跡	島崎町島崎	中世	457
245	城親賢の墓	島崎町島崎	中世	458
246	霊樹庵跡	島崎町島崎	中世	459
247	鬼塚さん古墳	島崎町三軒屋	古墳	460
248	井芹五輪塔・宝塔群	花園町井芹	中世	461
249	井芹城跡推定地	花園町	中世	462
250	絃江和尚碑	花園町柿原	江戸	463
251	永福寺跡	清水町高平	中世	464
252	浄国禅寺古塔碑	清水町高平	中世	465
253	天福寺跡	清水町打越	中世	466
254	船場山古墳	清水町津浦	古墳	467
255	宗厳寺跡	清水町津浦	中世	468
256	池田城跡	池田町岩立	中世	469
257	池田八幡放牛地蔵	京町	近世	470

遺跡地名表４

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　　代	備 考
258	往生院境内石造物	池田町	中世・近世	471
259	採釣園跡	坪井4丁目	近世	472
260	長岡監物屋敷跡	坪井4丁目	近世	473
261	成就院大喜山覚勝寺跡	中坪井町	中世	474
262	浄国寺跡	壷川1丁目	中世	475
263	金剛寺南乾山跡	新坪井町中坂	中世	476
264	仙勝院跡	京町1丁目	中世	477
265	円光寺跡	京町1丁目	近世	478
266	釈将寺跡	京町2丁目	近世	479
267	報恩禅寺境内石造物	坪井3丁目	中世	480
268	お薬園跡	薬園町	近世	481
269	遠矢塚	島崎町	中世	482
270	新町古寺跡・高麗門跡	新町3丁目	近世	483
271	古往生院跡	古鍛冶屋町	近世	484
272	板屋町・細工町寺院群	板屋町、細工町	近世	485
273	願行寺跡	横手町	近世	486
274	横手町寺院群	横手町	近世	487
275	狐穴古墳参考地	黒髪町下立田	古墳	488
276	宇留毛城床古墳	黒髪町宇留毛城床	古墳	489
277	渡鹿板碑	大江渡鹿	中世	490
278	八丁馬場板碑群	神水本町	中世	491
279	無漏寺跡	世安町川端	中世	500
280	伝立田将監墓・古塔碑群	龍田町上立田	中世	501
281	乙姫宮	上南部町	中世	502
282	楳国寺境内古塔碑群	小山町	中世	504
283	中山畜犬管理所五輪塔	小山町	中世	506
284	北向下の五輪塔	戸島町	中世	509
285	市営託麻団地	新南部託麻団地	縄文	511
286	西原	新南部	縄文	512
287	三郎塚古墳	健軍町三郎	古墳	513
288	佐土原芥川板碑	健軍町佐土原	中世	514
289	江津湖東岸	新生1丁目、健軍4丁目	縄文～平安	518
290	ミョウゲンジ屋敷板碑	健軍4丁目	中世	519
291	真宗寺入口地蔵	健軍4丁目	江戸	521
292	妙見の芥川板碑	健軍4丁目	中世	522
293	七軒町	七軒町	縄文～中世	534
294	一夜塘	小幡町	近世	535
295	上河原	黒髪町	縄文～古代	536
296	北島五輪塔群	池田町	中世	539
297	出町土居跡	京町	近世	540
298	光明寺跡	呉服町万2丁目ほか	近世	541
299	峰雲院跡墓地	中坪井	中世	542
300	常楽寺	黒髪町　下立田・小峰	中世	543
301	熊本駅前の石塘	春日町	近世	544
302	花畑館跡	花畑町	近世	545
303	代継神社の層塔	本荘３丁目	中世	546
304	浄信寺跡	呉服町万２丁目ほか	中世	547
305	熊本平野条里跡		古代・中世	548

熊本県（43）益城町（443）

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　　代	備 考
1	葉山	広崎　葉山・西原	弥生～古代	010
2	葉山古墳	広崎　葉山	古墳	011
3	古閑	古閑　宅地	縄文・弥生	012
4	福富	古閑　石井川ほか	縄文・弥生	013
5	広崎六本木	広崎　六本木	古墳	017
6	惣領	惣領　高木	縄文～古代	018
7	高木箱式石棺群	惣領　高木	古墳	019
8	梨木	広崎　梨木	縄文～弥生	071
9	古閑北	古閑　崎久保・横道	縄文～弥生	072

遺跡地名表5

第Ⅲ章　調査成果

第１節　基本層序

当地の基本層序は、第４図に示したとおり９つの層に分けられる。上層より、第１層から第6′層として名付けた。

第１層　客土。

第２層　旧耕作土。

第３層　茶褐色土。鉄分を含む。旧水田面。遺物を含む。

第3′層　漸移層。（３層から４層への漸移層）

第４層　白色粘土層。

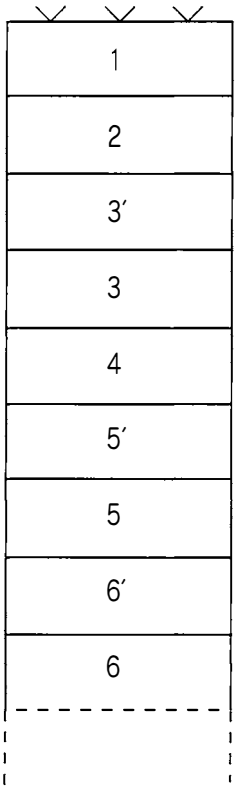
第5′層　黒褐色砂質土。（５層への漸移層）

第５層　黒色土。

第6′層　明褐色砂質土。縄文晩期の遺物包含層。

第６層　茶褐色砂質土。

この基本土層図は調査地区・地点によって、層序が異なるところを含めたうえで、再編したものである。



第４図　基本土層模式図

第１層は、平均して70㌢の厚さをもつ。

第２層は、20～40㌢の厚さをもって堆積する。

第３層は、いわゆるマンガン沈殿層で非常に硬い。その厚さは、5～10㌢である。当層は、調査区全域で確認されているわけではないが、これが撹乱による結果かどうかは判断出来ない。また、これまでの調査から当層の生成時期は、古くとも9世紀後半ではないかと考えられている。この土層の中にも土器が包含されているが形状を留めるものはほとんどない。なお、上面では柱穴等が検出される面でもある。

第４層は、白色粘土である。10～30㌢程度の厚さをもち、不純物はほとんど含まない。当層も調査区全域に存在しているものではない。住居跡など古代の遺構検出面である。

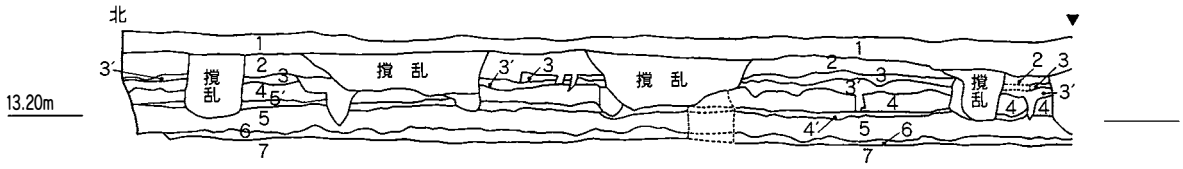
第5′層は、10㌢程度の厚さをもつ。

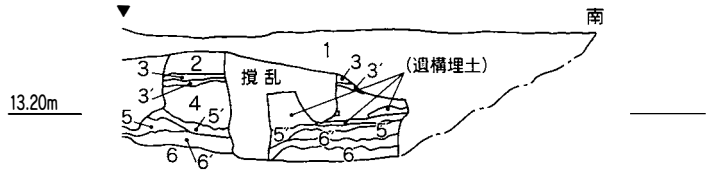
第5層は、10～20㌢程の厚さをもつ遺物包含層である。縄文時代の遺物が出土している。また、遺構検出面となる。

第6′層は、遺物包含層であるとともに、最終の遺構検出面である。層の厚さは、10～20㌢程度である。

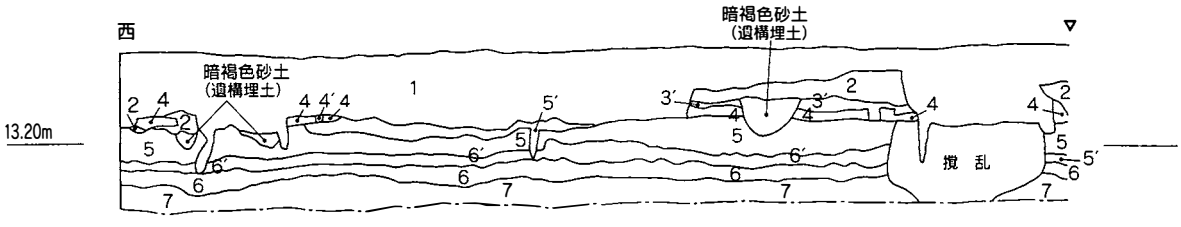
第6層は20㌢程度の厚さをもつ。以下、硬化した砂質土がつづくがこれが地山（黄色砂土＝第７層）である。

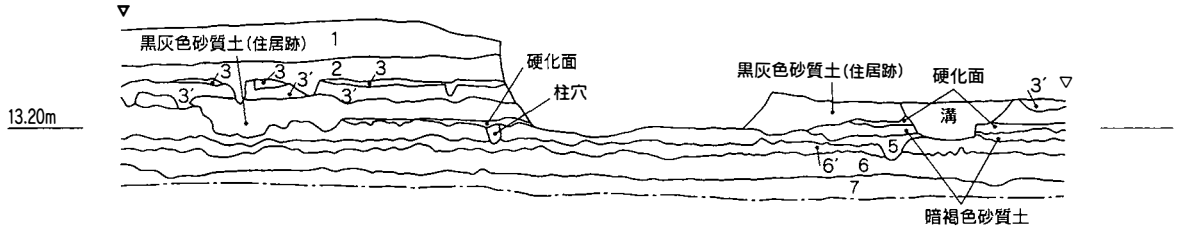
A 区

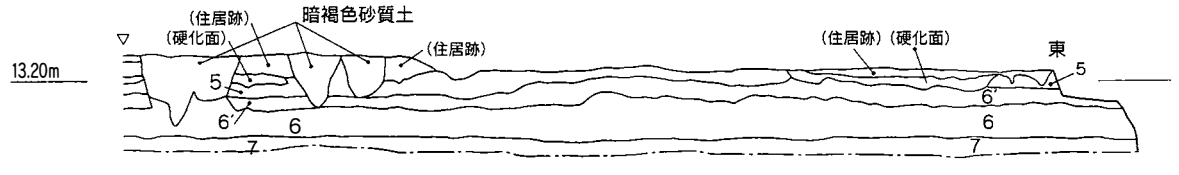


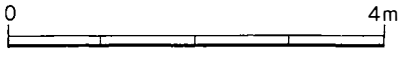


B 区









第5図　A区・B区　土層断面図

第２節　縄文時代の遺物

１　土器（第11図）

１は、縄文時代の鉢の一部分である。出土位置は特定できていない。焼成後の穿孔があり、補修のための穴の可能性をもつ。粘土を接合した痕跡も見られる。調整は、内外面とも基本的にはヘラミガキである。粘土には、0.5㎜以下の白色粒子を含んでいる。いわゆる北久根山式土器である。

２は、Ａ区５層出土の縄文時代の後期の浅鉢と考えられる。底部を欠損しており、全体を研磨する。外面上部には作成時の指の痕跡が残る。やや緩やかに立ち上がる胴部から急に内側に入り、上部は大きく外へ傾き口唇に至る。いわゆる天城式土器である。

２　石器（第６図）

石鏃、砥石、剥片素材及び使用痕のある剥片が出土している。出土層位は、５層のもの、またすでに原位置を保っていないものがある。

１は、打製の石鏃である。

５層中より石鏃が１点出土した。安山岩製のもので、両面とも緻密な加工が認められる。最大長3.2㌢、最大幅1.6㌢、最大厚0.4㌢、重量1.9㌘。

その他、剥片素材や砥石がある。剥片素材は２点がまとまった状態で出土している。

割合大きな素材の周縁部に不明瞭ながら剥離を施しているものがある。スクレイパーとして捉えると安山岩製のもので３点以上はある。また、それ以外のものを使用痕のある剥片とするとさらにその数は増える。

第３節　古代の遺構とその遺物

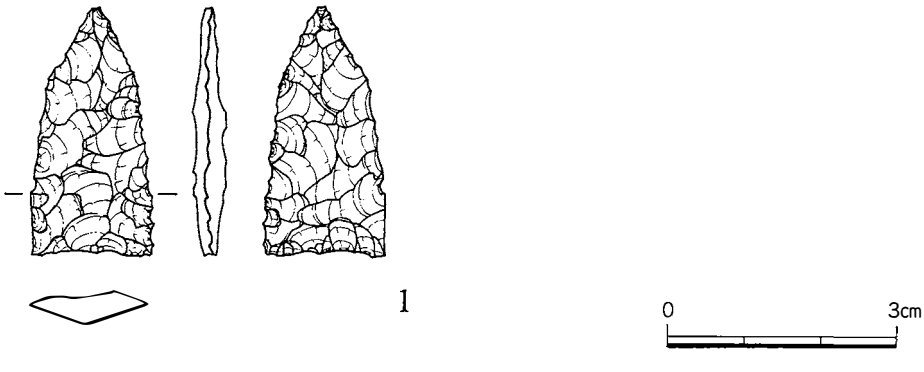
古代の遺構として、住居跡・溝・土坑・柱穴を検出した。

１　遺構

竪穴式住居跡

住居跡として把握したのは、総数11ある。全て古代のものと考えられる。検出の結果、攪乱などによりその一部しか残存していないものが多く、住居跡としての認定に迷うことも多かった。現地においては原則として、硬化面・炉跡の残存の有無を基準として判断した。

検出面は、４層白色粘土上面か同等層である。検出に際しては、そのほとんどが白色粘土上面で確認されるため、割合見やすい。



第６図　Ｂ区５層出土石鏃実測図

平面形は一部残存のものも含めて、方形あるいは隅丸方形を呈するものと考えられる。最大で１辺６㍍程度のものから、一辺1.5㍍程度のものまであるが、比較的大規模なものと小規模なものという大きく２つに分けることができそうである。これらの住居跡はほとんどが切り合いを持っており、集中して検出されるという特徴がある。なお、これまでの大江遺跡群の調査結果から、建て替えに際しては炉（カマド）を残すように建て替えられた例が多い傾向にあるが、当調査では、攪乱によりその傾向さえもはっきりつかめない状況であった。

１号住居跡（第７図）

隅丸方形の形状をもつものと考えられるが、その一辺のみを確認した。南部及び東側を攪乱により消失しているが、最低でも一辺３㍍以上の規模をもつものと推定できる。検出面からの深さは、４５㌢程度あり、立ち上がりがしっかりしている。硬化面は床面のほぼ全域にわたり、厚さ７～８㌢ある。住居に伴うと考えられる２つの柱穴を確認した。炉は確認していない。硬化面を除去すると、底面は凹凸のたいへん激しい状況になっていた。覆土は、白色粘土ブロックを含む明褐色砂質土の単一層である。

２・３号住居跡（第８図）

切り合いをもつものである。２号住居跡のあとに、３号住居跡が造られている。

２号住居跡は、北側を攪乱で切られているため詳細は不明であるが、一辺５㍍以上の規模をもつ方形のものと考えられ、北側に硬化面が残存している。覆土は、二層に分かれ上層は15㌢程度の厚みをもつ暗褐色砂質土、下層は黒褐色砂質土で白色粘土のブロックを含む層となっている。なお、攪乱を挟んでいるため断定はできないが、住居跡中央やや東よりに掘り込みが確認された。炭はないが、焼土、ソデ石の残存が確認できた。これは２号住居跡の範囲内にあるが、同一のものとは考えにくく、別の住居跡の炉とも考えられる。

３号住居跡は、一辺６㍍程度の規模をもつ方形と考えられる。ほぼ全域で硬化面が確認できた。また、住居跡に伴うと考えられる６つの柱穴を確認した。北西隅には焼土及びカマドのソデ石と考えられる砂岩系の３０㌢の高さをもつ角柱の石が残存していた。また、本来炭を含むと考えられる（焼）土の残存が確認されたが、中に炭はなかった。硬化面の厚さは、10㌢程度あり、硬化面を除去した後には、10㌢から20㌢程度の掘り込みが確認された。

４号住居跡（第７図）

四隅を全て攪乱で切られているため、詳細は不明だが、硬化面及び炭のひろがりで確認した住居跡である。
本来、第４層の白色粘土上面で検出されるものと考えられるが、この地域にはこの白色粘土層が存在せず、茶褐色土が存在していた。茶褐色土を掘り下げていくと、直下の黒色土上面で暗褐色砂質土の単層を確認した。これが何らかの遺構と判断して、掘削していくと硬化面が検出された。

硬化面の厚さは、5～10㌢程度で、それ以下に、暗褐色砂質土で15㌢程度の厚さをもつ掘り込みを確認した。硬化面のひろがりは、ほぼ全域にあったものと考えられる。また、検出面より深さ30㌢の深さをもつ柱穴を１基確認した。

５・６号住居跡（第９図）

Ｂ区北端部で確認されたもので、６号住居跡を５号住居跡が切る。南側は攪乱、また北側は１号溝に切られているため全体像は不明である。６号住居跡は一辺１．５㍍程度の規模をもっている。また、５号住居跡は、６㍍程度の規模をもつものと推定される。

５号住居跡に関しては、南北方向の後世の溝（１溝）により切られているが、そのほぼ全域に硬化面が残存している。基本的には硬化面の広がりをもって住居跡として認定したものである。なお、南側には硬化した焼土面が確認されている。硬化面との位置関係や検出した高さから５号住居跡と同一と判断した。また、住居跡に伴うと考え

られる５つの柱穴を確認したが、これらの位置関係から柱として成立するかはよく分からなかった。

７・８号住居跡（第９図）

切り合いを持つ。５・６号住居跡と同じく、攪乱及び１溝によって切られている。７号を８号が切っている。もともと７号住居跡が深いため、古い７号住居跡が残存していると考えられる。平面形は、方形と考えられるが、その規模は最低でも７号が３㍍以上、また８号が３．５㍍以上の一辺を持つものと考えられる。７号住居跡については、焼土、硬化面はない。また、８号については、硬化面が残るものの、焼土・柱穴等は確認できていない。

９号住居跡（第10図）

東側は調査区外となるが、平面形の大部分を検出できた。一辺2.5㍍程度の方形の規模をもつものである。中央部には硬化面が残存し、南東炭に焼土が残る柱穴を確認できた。炉に伴うものの可能性が高い。床面中央には、台石と考えられるものが据え置かれた状態で出土した。検出面からの深さは、30㌢程度であり、その埋土は黄褐色砂質土の単層となっている。その直下に５㌢程度厚さをもつ硬化面が存在する。さらに、その直下に黄褐色砂質土で白色粘土のブロックを含む５㌢程度の厚さの層が堆積し、それ以下は地山となる。

１０号住居跡（第10図）

北半を攪乱により切られるが、一辺5.5㍍程度の規模をもつものと推定できる。中央にのみ硬化面を確認した。また南東隅に炉の残存があった。東壁側は階段状となっており、他の住居跡のあり方と比較して、異質である。検出面からの深さは40㌢程度ある。覆土は、硬化面上層が２層に分かれ、基本的に上層より20～25㌢程度の厚さをもつ明黄褐色砂質土層、その下に10㌢程度の暗褐色砂質土となっている。

１１号住居跡（第８図）

南北を攪乱によりなくし平面形は不明であるが、一辺最低3.5㍍程度の規模を持つ、隅丸方形を呈するものと推定できる。東壁側に焼土を確認した。ほぼ中央部に硬化面が残存しているが、このひろがりが全域に及ぶかどうかは不明である。硬化面を除去すると地山となる。

溝

溝は４条検出した。一つの溝は東西方向に、それ以外の三つの溝は南北方向にはしるものである。

２号溝（第14図）

白色粘土の上面で検出されたもので、東西方向にはしる。西側は途中で終息する。幅50㌢～60㌢程度の小規模なもので、検出面からの深さは10㌢程度、底面は平らである。２・３号住居跡を切る。覆土は暗灰色砂質土の単一層である。出土遺物は少なく、土師器の細片が目立つ。

３号溝（第15図）

白色粘土の上面で検出されたもので調査区東側に位置する。南北に走り、その幅は一定しない。北側では、1.5㍍の幅を持ち、南側では50㌢程度となる。北側には段があり、２段で落ち込む。現状で、11㍍の長さを確認している。平均して40㌢の厚さをもつこの溝は、底面はほぼ平らとなる。覆土は明褐色砂質土の単一層である。出土遺物はさほど多くはないが、古代の土師器が多い。

４号溝（第15図）

３層の茶褐色土（鉄分を含む層）で検出されたものである。９㍍の長さを確認した。幅は１㍍程度でほぼ一定しており、南北方向に走る。検出面からの深さは35㌢程度で、底面はほぼ平らである。覆土は茶褐色砂質土の単一層である。出土遺物は、２・３溝より若干多い程度で、須恵器・土師器片がある。

５号溝（第15図）

白色粘土上面で検出されたもので、４号溝とほぼ並行に南北方向に走る。その幅は1.3㍍程度で一定している。検出面からの深さは15㌢程度と浅く、底面はほぼ平らである。覆土は茶褐色砂質土の単層となっている。出土遺物では須恵器が多い。

土坑（第８図）

土坑は１基確認した。半分を攪乱（ガス管）により切られている。

１号土抗

本来は、円形と考えられ、直径1.5㍍程度のものである。その落ち込みはほぼまっすぐに落ち、北側壁寄りにもう一段落ち込む。すなわち、50㌢程度まっすぐに落ち、段を付けてさらに50㌢程度落ち込むといったものである。覆土は２層に分けられる。

柱穴群（第16~19図）

Ａ区、Ｂ区と併せて、64の柱穴を確認した。ほぼ全域に分布する。

建物を構成するものはない。検出面としては３層の茶褐土（鉄分を含む層）、４層の白色粘土層上面、５層の黒色土、６′層の明褐色砂質土の各上面である。４層検出の柱穴は、その大半が、黒褐色砂質土の覆土である。同様に５層は黄褐色砂質土層、また、６′層は５層の黒色土層をもっており、単層となっている。

２　遺物（第１１～１３図）

３は、10号住居跡出土の土師器の甕形土器で、口縁部片である。緩やかな傾斜で大きく開く。調整は、ヨコナデである。0.2㍉前後の白色粘土を含む。反転復元。

４は、10号住居跡出土の土師器で、甕形土器の口縁部片である。やや外反しながらも真っ直ぐに立ち上がる。調整は、ヨコナデである。１㍉前後の白色粒子を含む。反転復元。

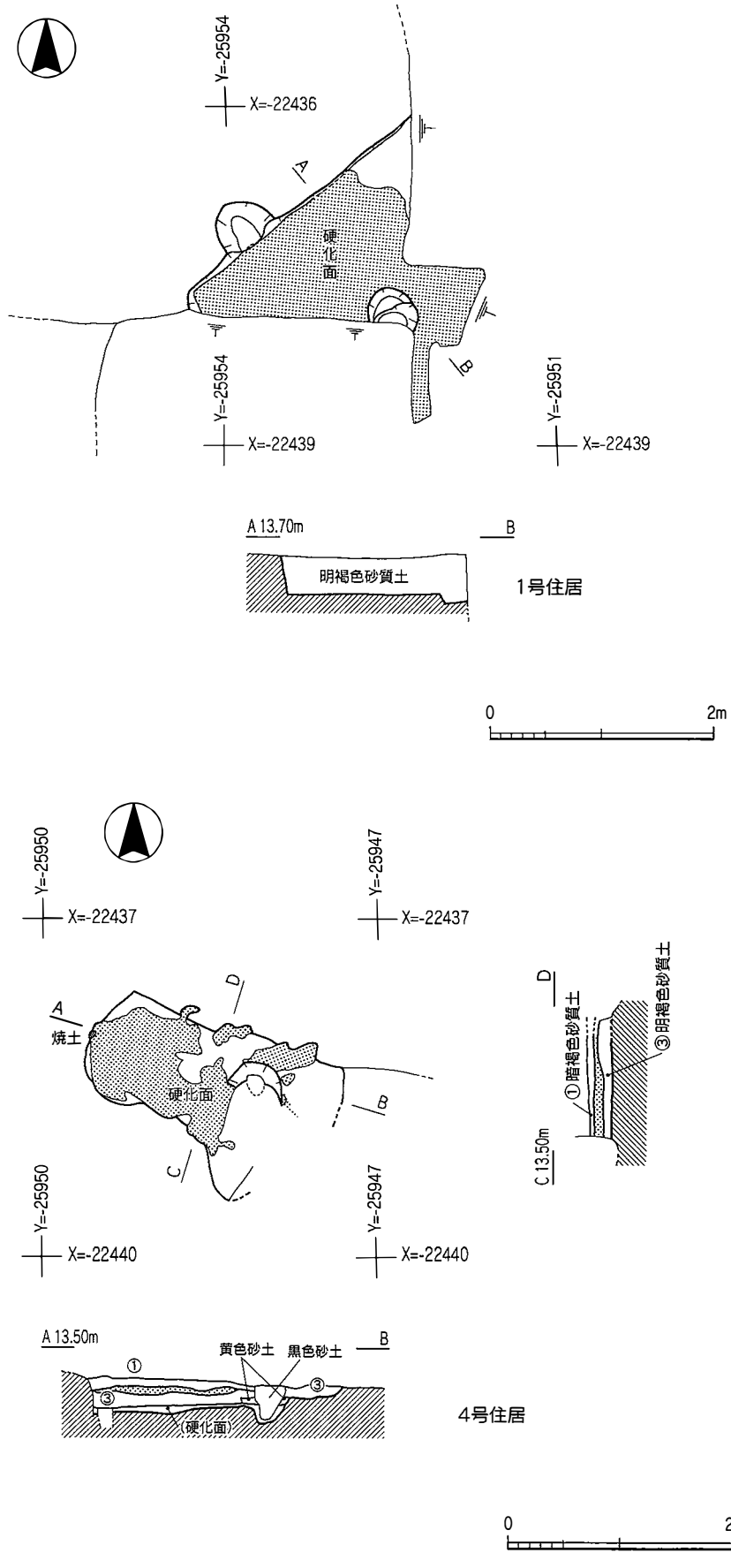
５は、10号住居跡出土の土師器で甕形土器の口縁部である。くの時に近い口縁である。接合痕が確認できる。その部分に沈線１条が施される。調整は、内面下部がヘラケズリであり、他はナデ調整である。0.5㍉前後の白色粒子を含む。風化が進んでいる。反転復元。

６は、３号住居跡出土の土師器の甕形土器で口縁部片である。丸みのある口縁端をもつ。１㍉前後白色の粒子を含む。

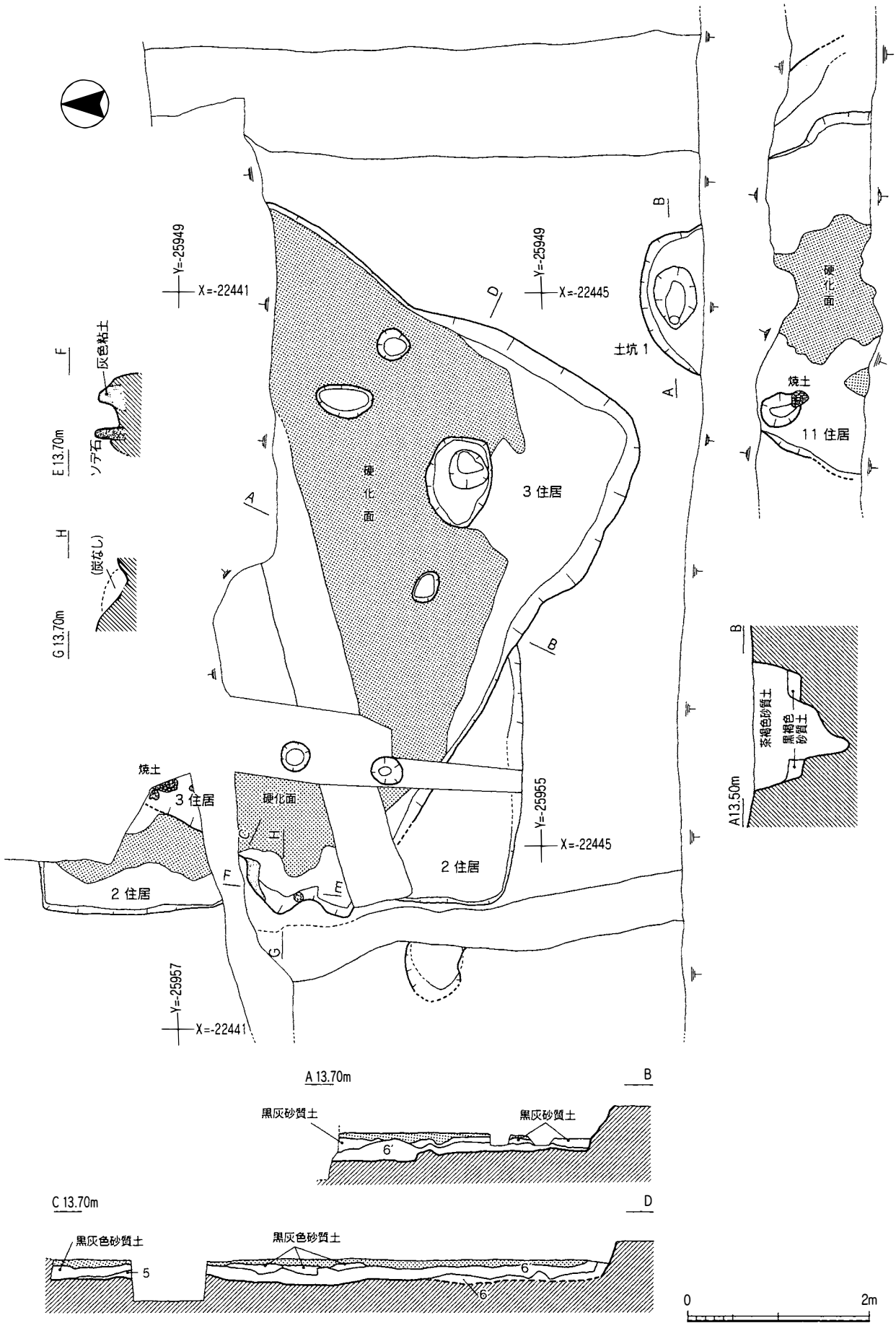
７は、９号住居跡出土の土師器の壺で口縁部のものである。外面から内面上部にかけては、ナデ調整を、内面の他の部分については、主に横方向のヘラケズリである。外面上部には、指で押さえた痕が残る。0.5㍉前後の白色粒子を含む。反転復元。

８は、７号住居跡出土の土師器の甕形土器で口縁部である。体部は内に傾きながらも、ほぼ真っ直ぐに立ち上がり、口縁端で広く外反する。その部分が最大厚となる。調整は、いわゆる口唇部がヨコナデで、外側下部が縦方向のハケ、また、内側下半はヘラ削りで、横方向である。１㍉以下の白色粒子を含む。反転復元。

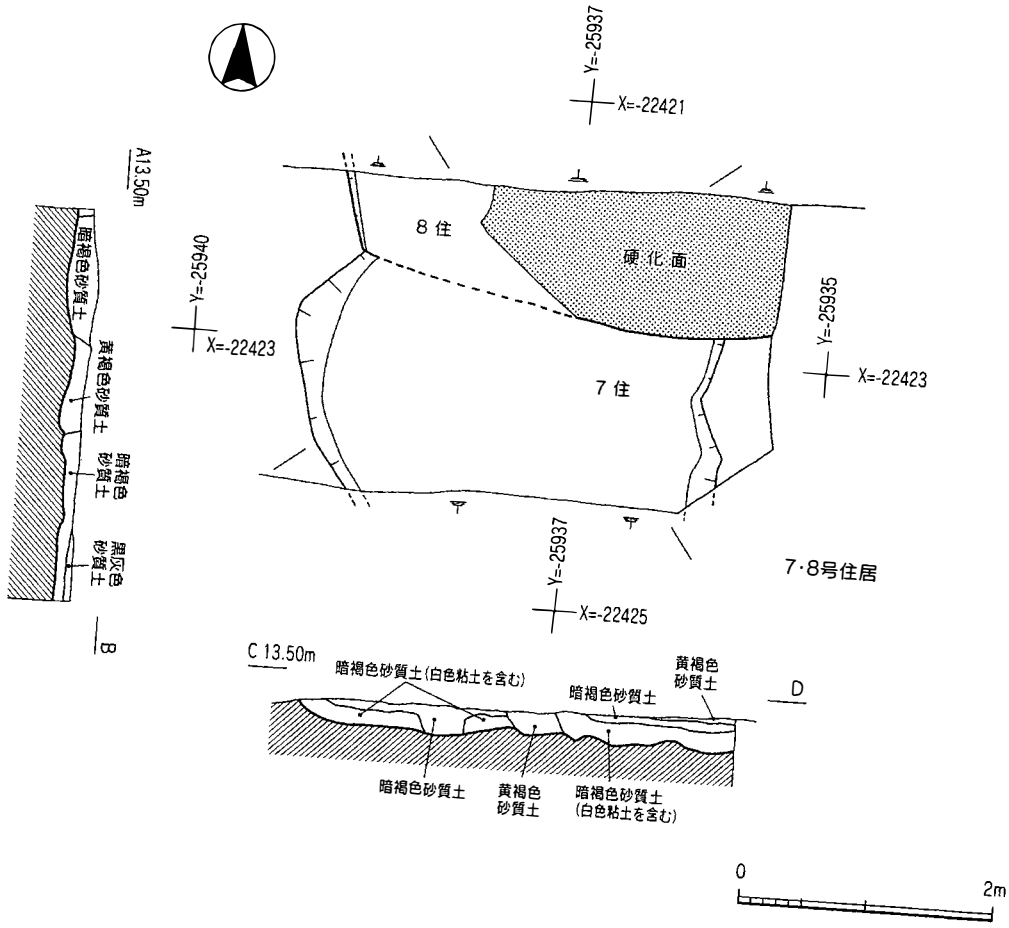
９は、Ａ区出土の土師器の甕形土器である。体部はまっすぐに立ち上がり、口縁部で大きく外反する。調整は、



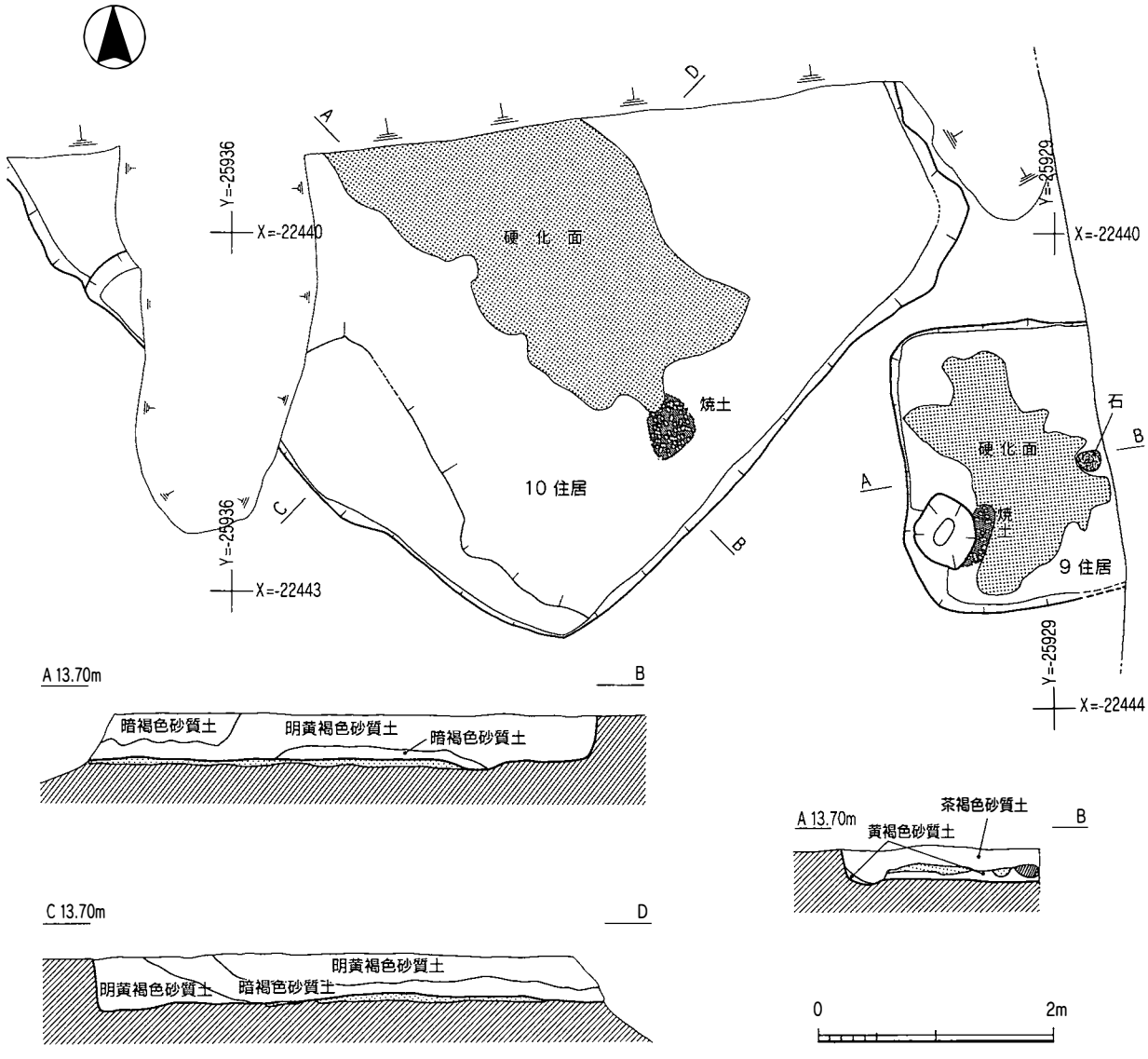
第7図　1・4号住居跡実測図



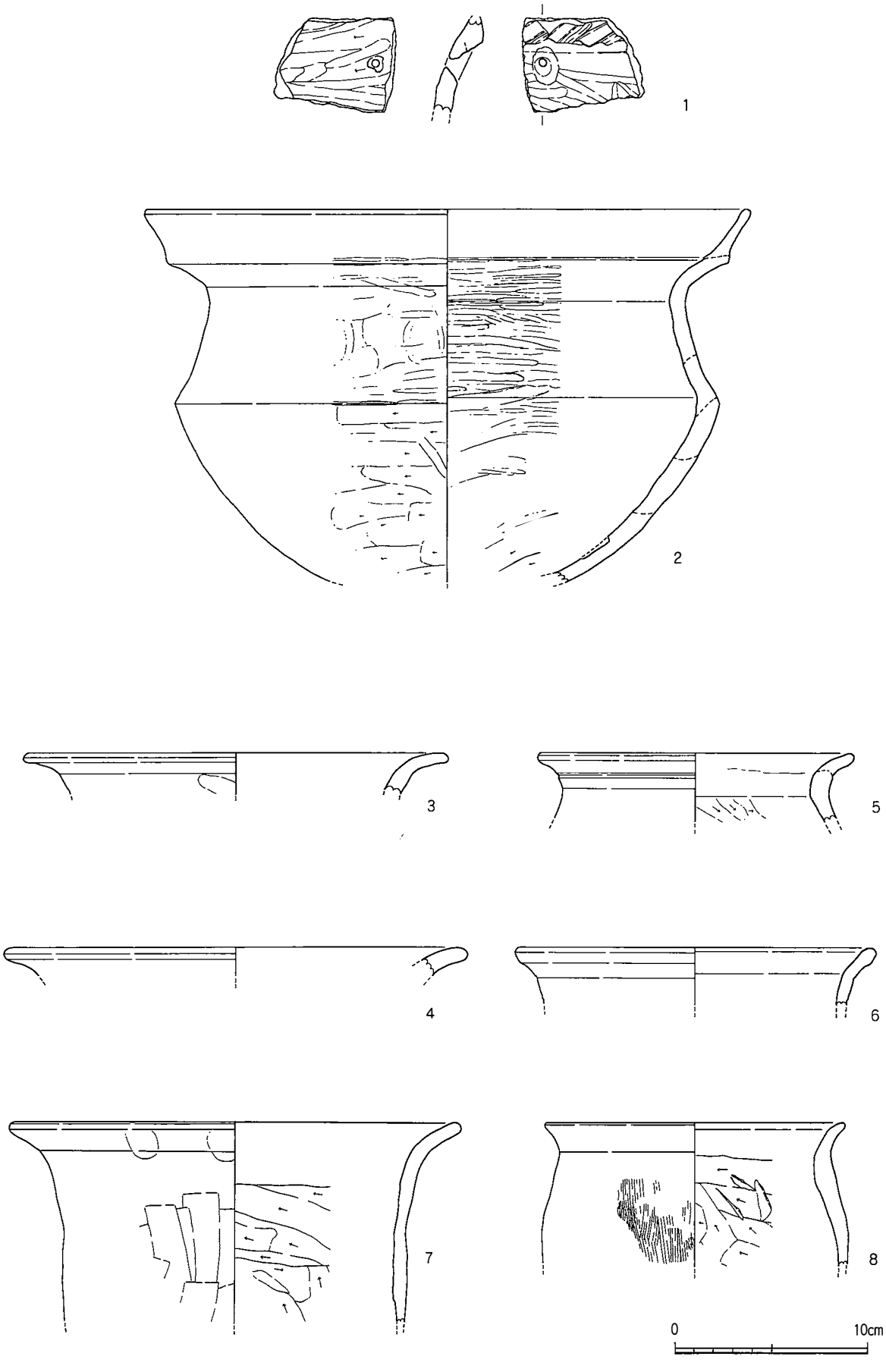
第8図　2・3・11号住居跡及び1号土坑　実測図



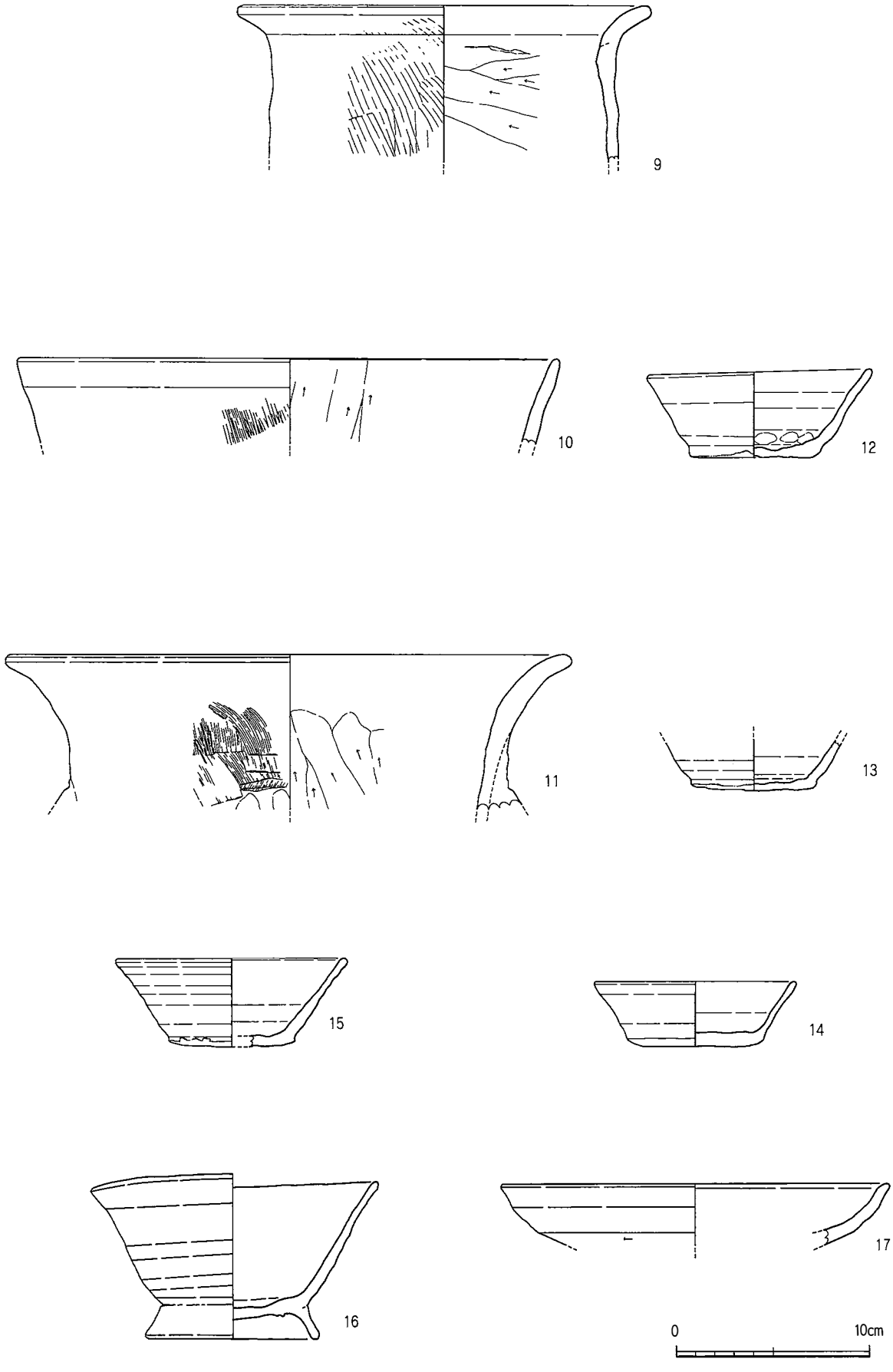
第9図　5·6号及び7·8号住居跡　実測図



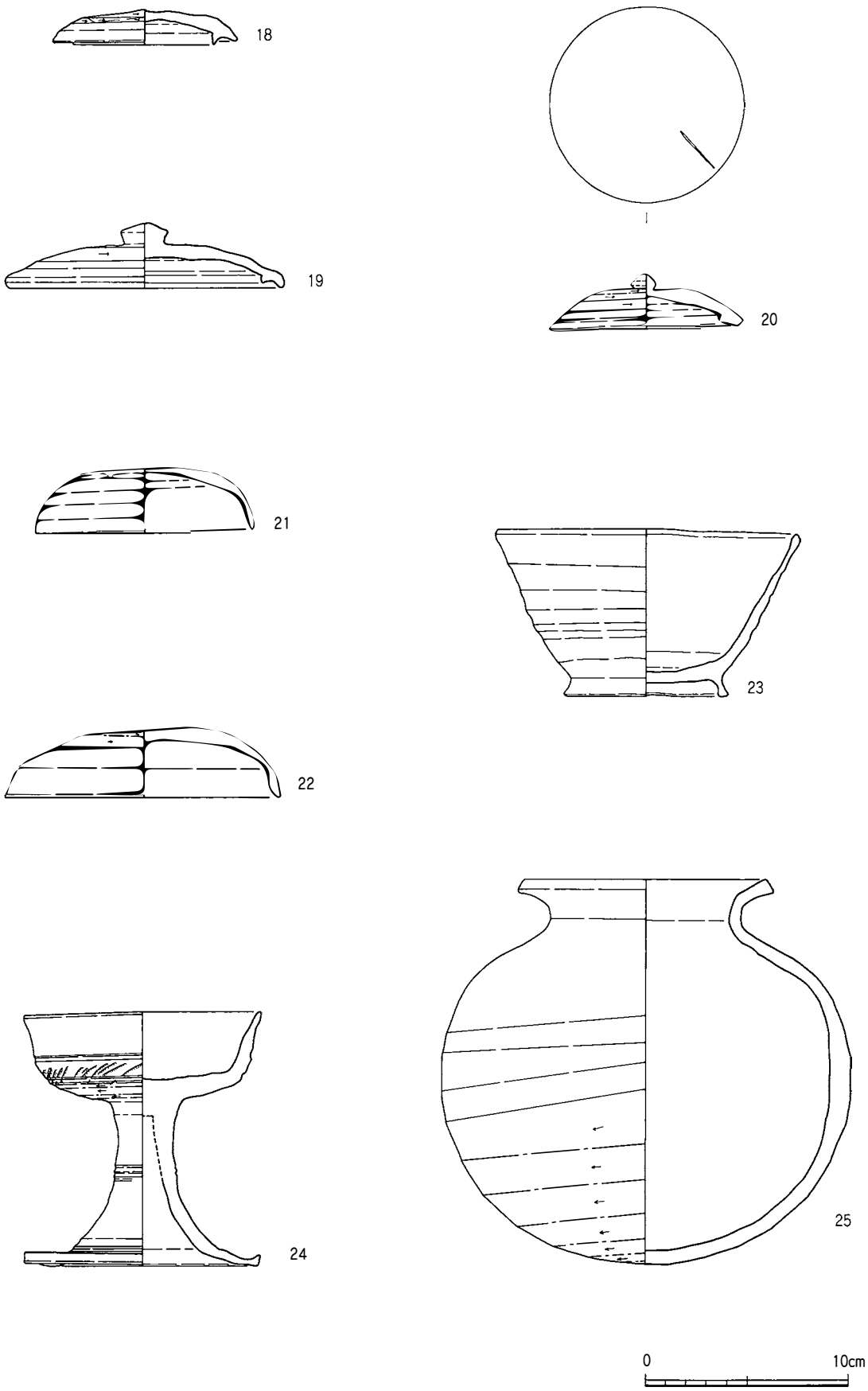
第10図　9・10号住居跡　実測図



第11図　出土遺物実測図（1）



第12図　出土遺物実測図（2）



第13図　出土遺物実測図（3）

内面下部がヘラケズリ、口縁部がヨコナデ、外面下部がハケ調整となっていて、ハケの方向は、主として斜め方向のものである。1㍉以下の角閃石、雲母、白色粒子を含む。反転復元。

10は、10号住居跡出土の土師器の甑と考えられるもので口縁部片である。体部は外向きにほぼ真っ直ぐに立ち上がる。調整は、内外面の上部がヨコナデ、外面下部が縦方向のハケ、内面下部がヘラ削りである。反転復元。

11は、10号住居跡出土の土師器の甑である。内面はヘラケズリ、外面は縦方向のハケ調整である。1㍉前後の白色粒子を含む。

12は、土師器の坏である。底部は回転ヘラ切りで、内外面の調整は、ヨコナデである。内側の底部に、指で押さえた痕が残る。0.5㍉前後の白色粒子を含む。A区出土のもので、原位置は保っていない。

13は、A区出土の土師器の坏である。底部のみのものであるが、外へ開きながらもまっすぐにのびる。調整は、底部が回転ヘラ切りののちナデで、その他は、内外面ともヨコナデである。2㍉以下の白色粒子を含む。

14は、4溝出土の土師器の坏である。底部は回転ヘラ切りで丸みをもっている。他の部分はナデ調整である。0.5㍉以下の白色粒子を含む。

15は、A区出土の土師器の坏である。体部は外へ大きく開きながらも、ほぼ真っ直ぐに立ち上がる。

16は、3溝出土の土師器の椀である。外へ開くやや長めの高台が付く。ほぼ真っ直ぐに直線的に立ち上がる。高台は、細長い。調整は、ヨコナデである。1㍉以下の白色粒子、雲母を含む。器形は全体的に、ゆがんでいる。

17は、3号溝出土の土師器の皿と考えられるもので底部を欠く。口縁部はその先端で外に開く。調整は、ヨコナデ、外面に一部ヘラケズリが見られる。0.5㍉以下の白色粒子を含む。反転復元。

18は、10号住居跡出土の須恵器の蓋である。調整は、天井部がヘラ切りのちナデで、他の部分はナデである。1㍉以下の白色粒子を含む。完形品である。

19は、3号住居跡出土の須恵器の蓋である。やや扁平な宝珠形のつまみをもち、全体的に自然釉がかかる。器高は、短い。1㍉以下の白色粒子を含む。

20は、10号住居跡出土の須恵器の蓋である。天上部は、回転ヘラケズリ、他の部分は、ヨコナデである。宝珠形のつまみをもち、外面にはヘラ記号と考えられる線状痕が残る。1㍉以下の白色粒子を含む。

21は、10号住居跡出土の須恵器の坏蓋と考えられる。天上部は、ヘラ切り後、ナデ調整である。1㍉前後の白色粒子を含む。坏身の可能性もある。ほぼ完形。

22は、10号住居跡出土の須恵器の坏蓋である。天上部は、回転ヘラケズリで、他の内外面はナデ調整である。胎土は粗く、2㍉以下の白色粒子を含む。器形のゆがみが大きい。ほぼ完形。

23は、3溝出土の須恵器の椀である。体部は、ほぼ直線的に立ち上がる器形で、高台が付く。内外面ともナデ調整を施す。全体的にややゆがんでいる。1㍉以下の白色粒子を含む。反転復元。

24は、7号出土の須恵器の高坏である。全体的にヨコナデの調整で、丁寧である。4ヶ所に沈線が巡る。坏部下端の2条の沈線に囲まれる部分に刺突文が入る。2㍉以下の白色粒子を含む。ほぼ完形。

25は、7号住居跡出土の須恵器の壺である。1/2程度残存している。底部外面にヘラケズリ他の部分はヨコナデである。焼成が弱いようで、作りも丁寧でない。

第4節　近世以降の遺構とその遺物

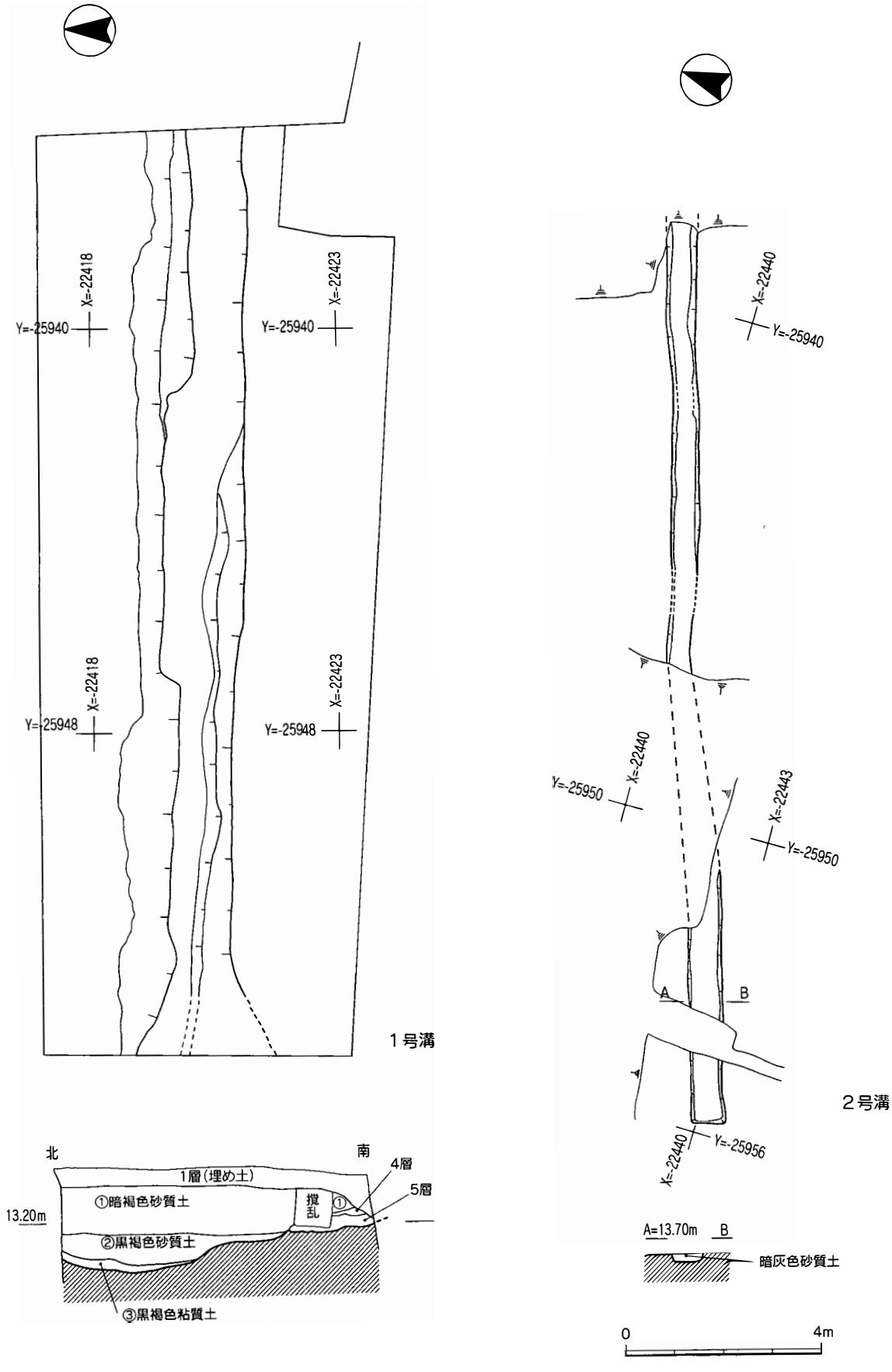
溝

1号溝は、調査区北端で確認されたもので、東西方向に走る。第1層の客土除去後すぐに確認された。4㍍以上の幅を持つ大規模なもので、南側ではその落ち込みが確認されている。3つの段を持ちながら、ゆっくりと落ち込んでいる。堆積状況は、大きく3層に大別できる。上層より①層　暗褐色砂質土、②層　黒褐色砂質土、③層　黒褐色粘質土となる。最深では、1.8㍍程度の深さを持つ。なお、北側については、調査区外へ延びており確認できない。出土遺物には中世のものを含むが、近世から現代にかけてのものが大半である。

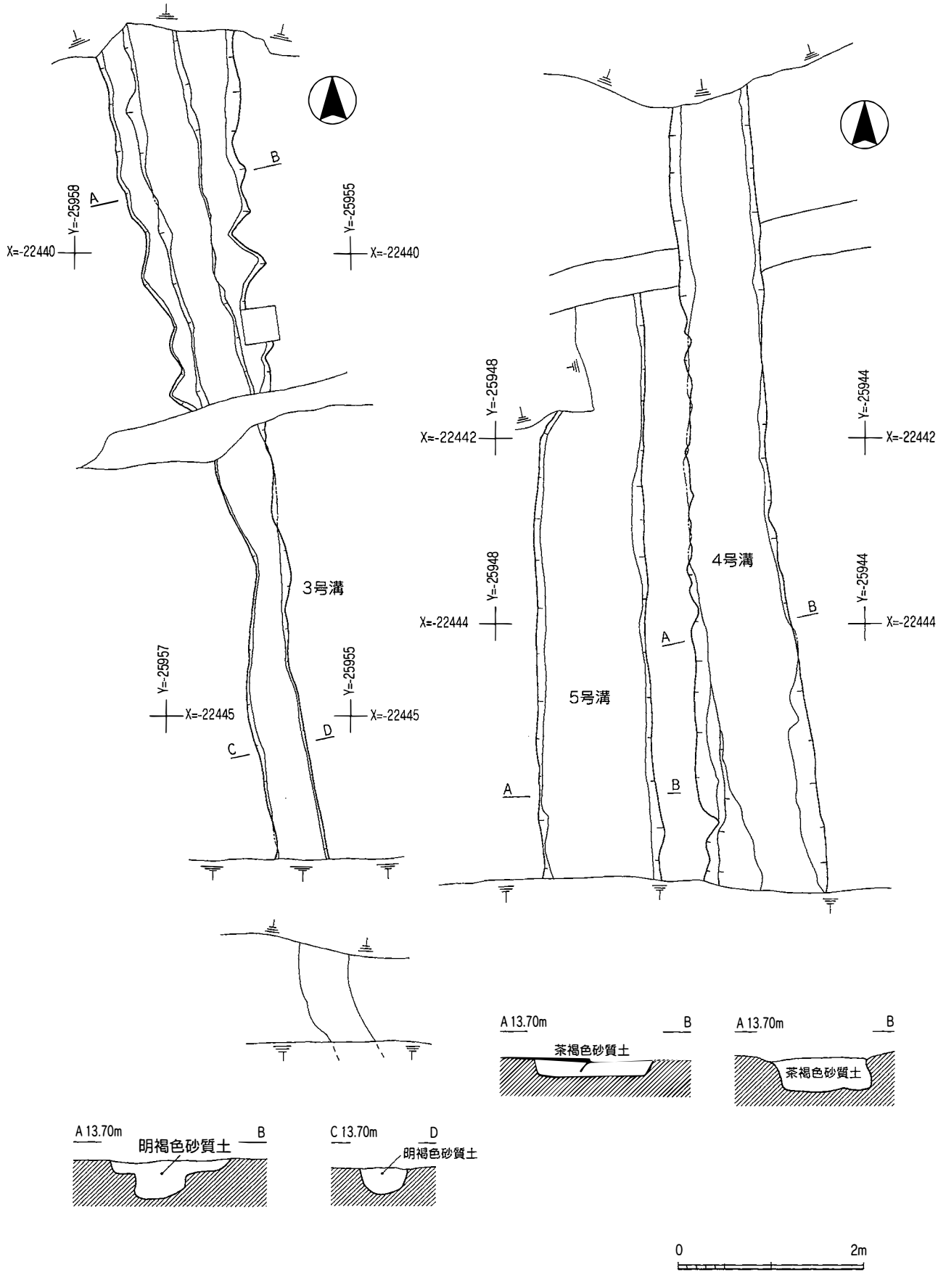
第２表　掲載遺物（土器）観察表

（　）は復元

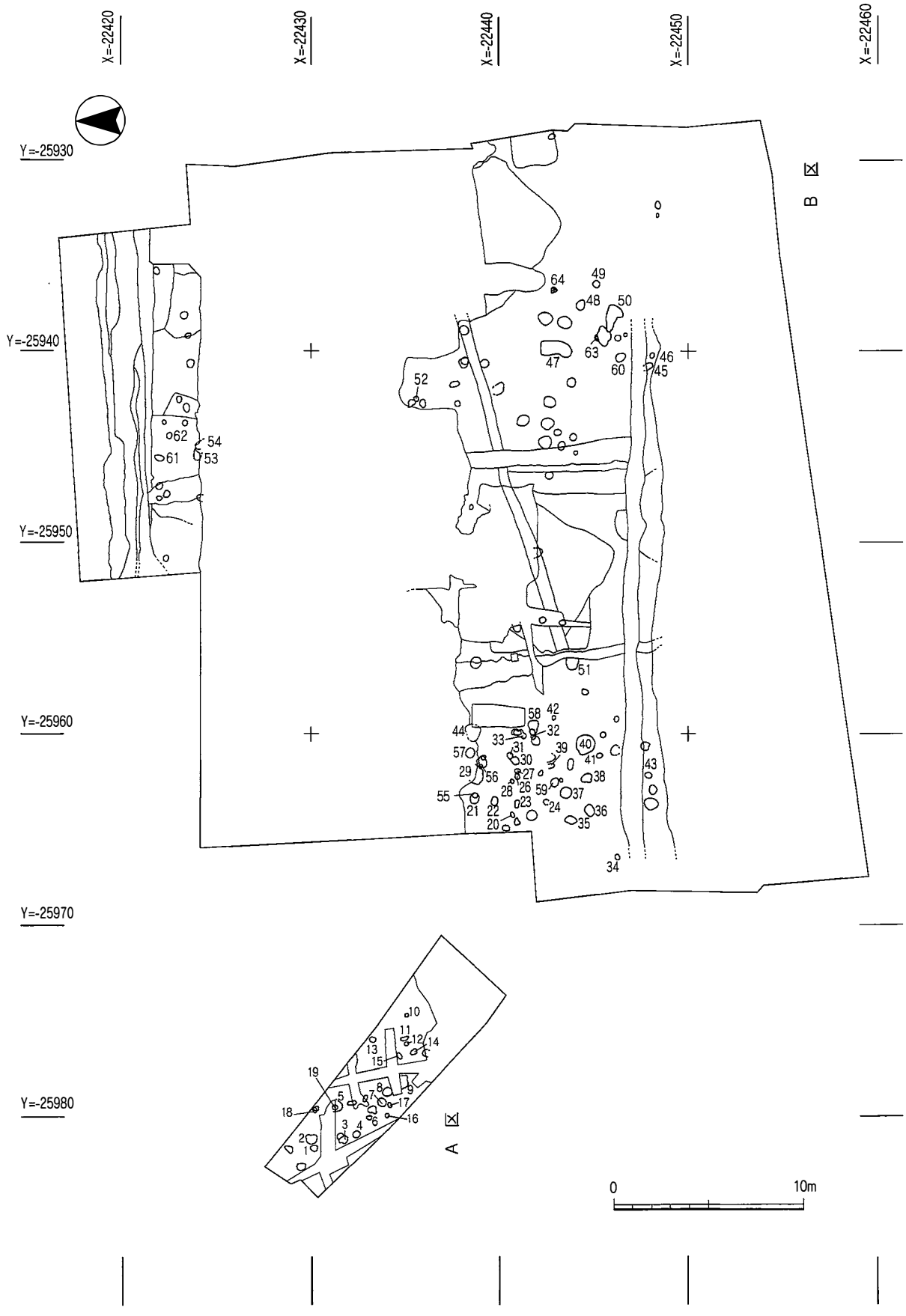
	種類	器種	口径(㎝)	器高(㎝)	底経(㎝)	色調(外面)		色調(内面)		出土地
1	縄　文	鉢		4.7		オリーブ黒	7.5Y3/2	にぶい黄	2.5Y6/3	不明
2	縄　文	鉢	(31.6)	19.2		黄橙	10YR7/8	黒褐	10YR3/1	包含層
3	土師器	甕	(22.2)	2.1		橙	7.5YR6/6	橙	2.5YR6/8	住居跡
4	土師器	甕	(18.8)	2.9		橙	2.5YR6/8			住居跡
5	土師器	甕	(16.4)	3.5		赤橙	10R6/6	黄褐	2.5Y5/3	住居跡
6	土師器	甕	(24.3)	1.5		明赤褐	5YR5/6			住居跡
7	土師器	甕	(23.7)	(10.5)		黒褐	2.5Y3/1	暗赤褐	2.5YR3/6	住居跡
8	土師器	甕	(18.6)	7.3		橙	7.5YR6/4	褐灰	5YR4/1	住居跡
9	土師器	甕	(21.5)	8.0		明黄褐	10YR7/6	灰黄褐	10YR5/2	A区
10	土師器	甑	(28.2)	4.3		にぶい黄橙	10YR7/4			住居跡
11	土師器	甑	(29.4)	7.9		橙	7.5YR6/4			住居跡
12	土師器	坏	11.6	4.5	6.3	明黄褐	10YR7/6			A区
13	土師器	坏		2.6	6.4	明赤褐	2.5YR5/8			A区
14	土師器	坏	(10.4)	(3.8)	5.2	橙	7.5YR7/6			溝
15	土師器	坏	12.0	4.5	6.5	明赤褐	2.5YR5/8	橙	7.5YR7/6	A区
16	土師器	椀	14.8	8.5	9.0	橙	7.5YR7/6			溝
17	土師器	皿	(20.0)	3.2		橙	7.5YR7/6			溝
18	須恵器	蓋	9.1	1.8		にぶい赤褐	5YR5/4			住居跡
19	須恵器	蓋	13.9	3.2		緑黒	10G2/1			住居跡
20	須恵器	蓋	9.6	2.7		オリーブ灰	2.5GY5/1	暗青灰	5B4/1	住居跡
21	須恵器	坏蓋	10.8	3.3		オリーブ黄	5Y6/4	灰	5Y5/1	溝
22	須恵器	坏蓋	13.7	3.4		灰オリーブ	7.5Y4/2	暗赤灰	7.5Y3/1	住居跡
23	須恵器	椀	(15.0)	(8.2)		灰白	5Y7/2			溝
24	須恵器	高坏	11.8	11.5	12.5	灰	7.5Y4/1	オリーブ灰	2.5GY6/1	住居跡
25	須恵器	壺	(12.6)	13.9		灰白	5Y7/2			住居跡



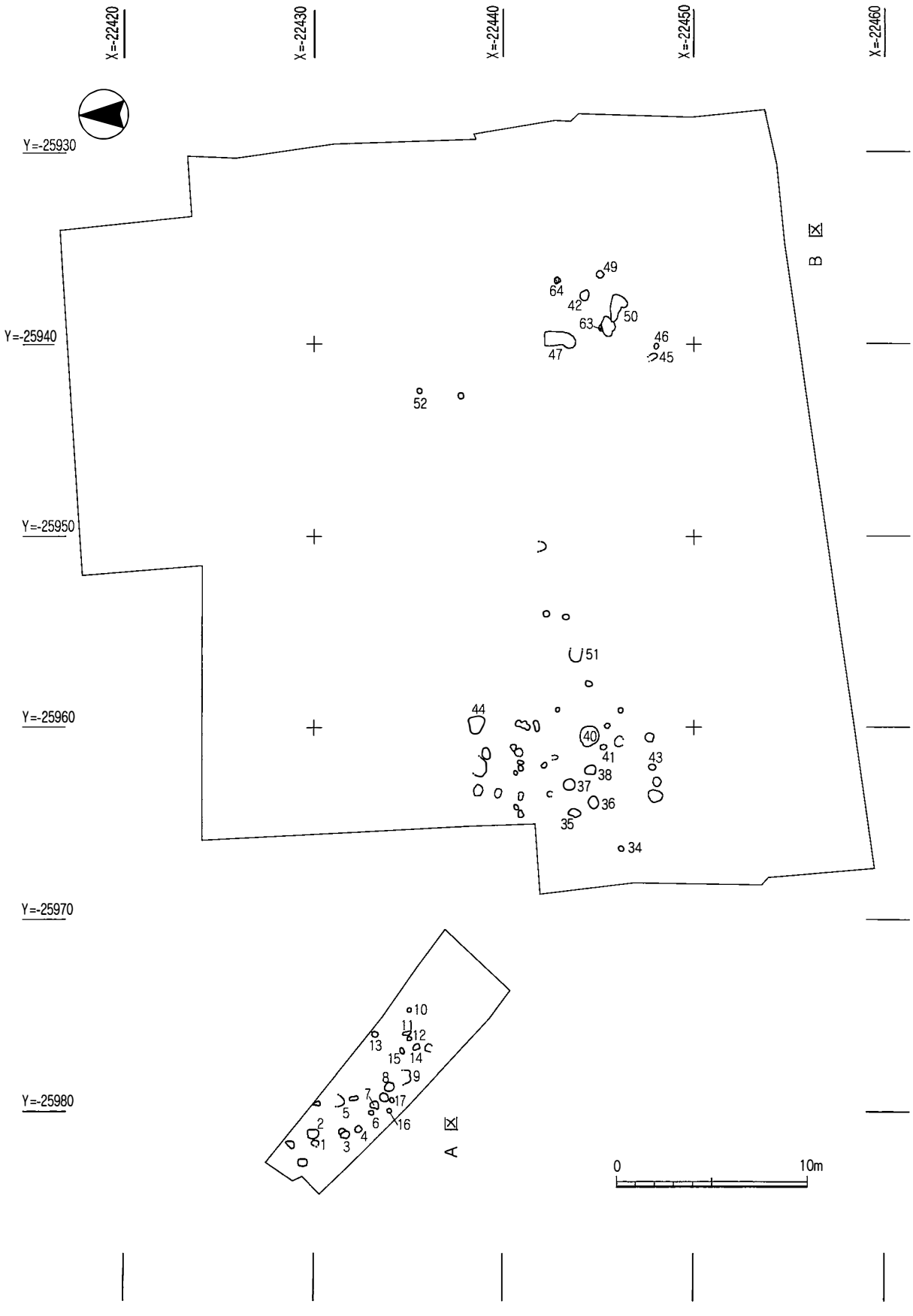
第14図　1・2号溝　実測図



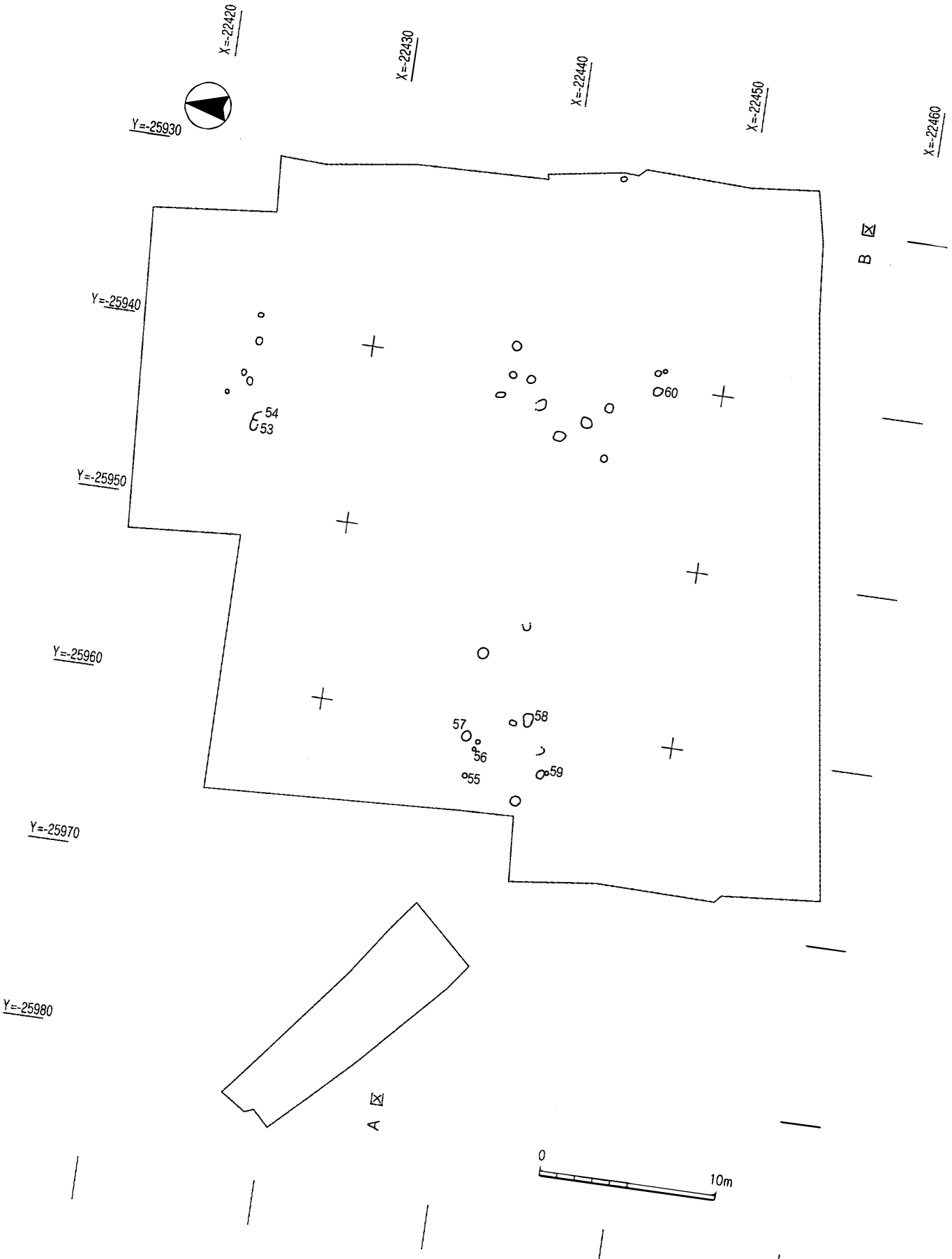
第15図　3・4・5号溝　実測図



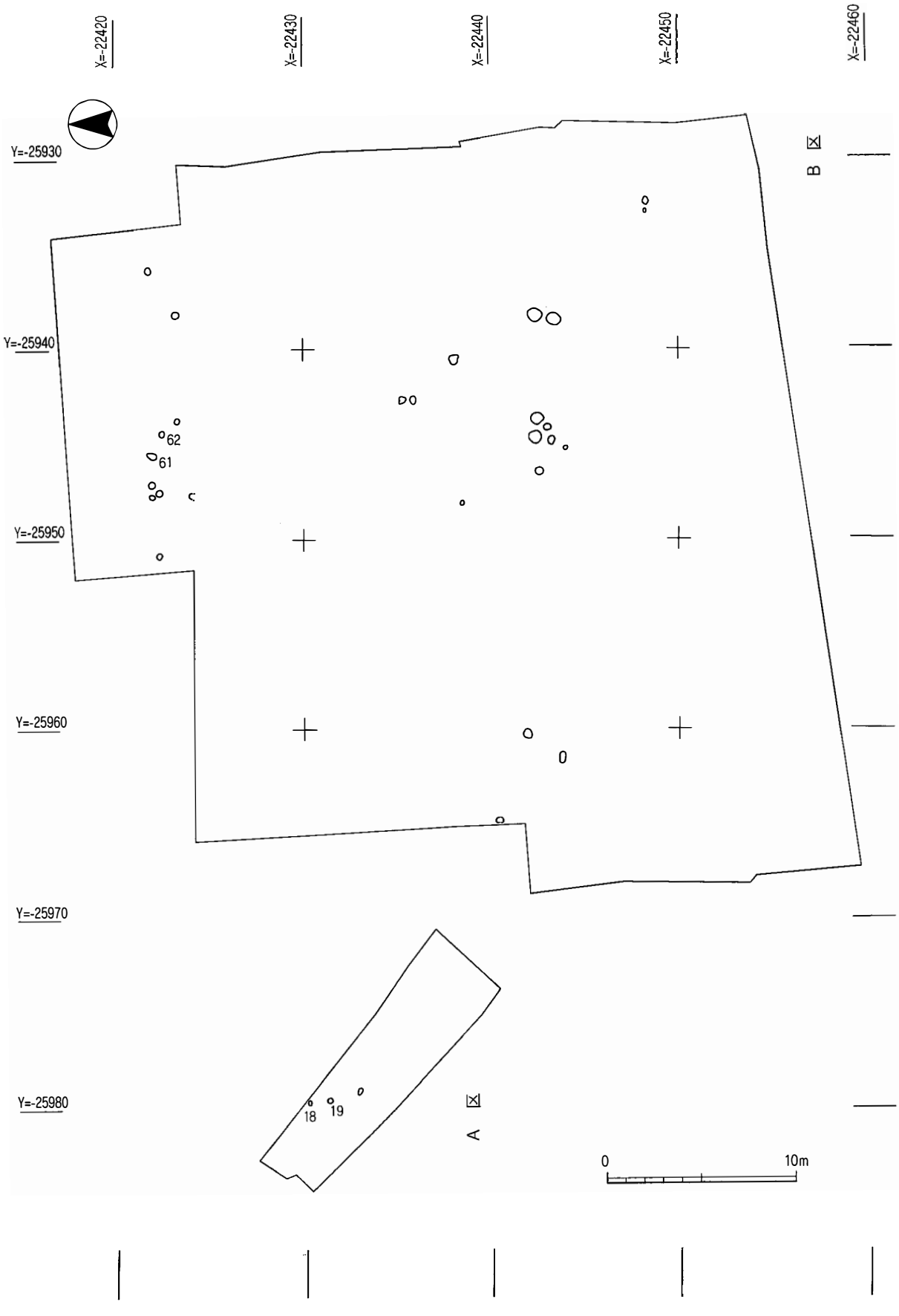
第16図　柱穴検出　全体図



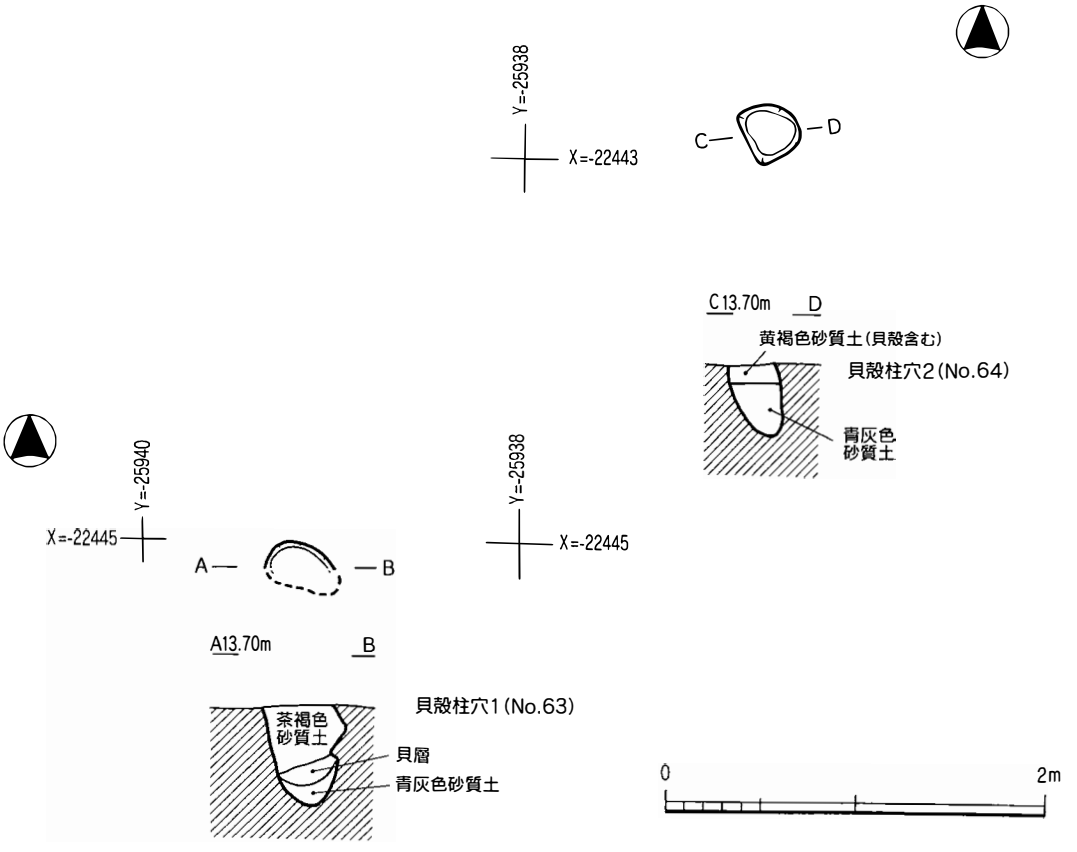
第17図　第4層検出柱穴位置図



第18図　第5層検出柱穴 位置図



第19図　第6′層検出柱穴 位置図



第20図　貝殻柱穴　実測図

第５節　不明遺構

貝殻柱穴

４層白色粘土の上面からの掘り込みを確認した。ただし、現地調査時には、直下層の５層で検出したものである。２柱穴を確認した。この名称は単に貝殻の入った穴という意味で呼ぶこととする。

貝殻柱穴１

直径40㌢程度りの規模をもつ、深さ50㌢のものである。覆土は３層に区分される。上層より茶褐色砂質土、貝層、青灰色砂質土となる。

貝殻柱穴２

直径30程度の規模を持つ。覆土は２層に分かれ、上層より貝殻を含む茶褐色砂質土、青灰色砂質土となる。

第Ⅳ章　まとめ

古庭坊団地建て替えに伴い実施した調査区は、道路（進入路）及び恒久的な建築物の範囲で、その対象面積は約1,900㎡であった。ただし、すでに攪乱により消失していた面積も広大で実質的な調査面積はおよそその半分程度となった。

調査地の標高は、約14.5㍍である。検出した遺構には、主として住居跡と溝があった。

住居跡については、古代のものと考えられ、切り合いが顕著であった。これまでの大江遺跡群の調査でも住居跡が集中して検出されることが一つの特徴としてあげられている。すなわち建て替えも多かったということができよう。その際、古いカマドを残すように軸をずらしているのが多いという傾向が指摘されているが、今回、確かにそのように考えられる住居跡は存在していた。ただ、当地域においてそれが普遍的なものかどうかについては、カマドの位置がはっきりしないこともあり判然としない。カマドの存在を具体的に証明できるものはなく、ソデ石や焼土の残存から推測可能と考えている。なお、その位置については、基本的に方形あるいは隅丸方形と考えられる住居跡の一辺で、西側に多い傾向にある。

住居跡群の集中についても、攪乱がなければ今回確認した数の数倍を検出できたのではないかと思われる。住居跡内出土遺物はさほど多くない。

溝については、古代のものと考えられるものが４条確認されたが、１条を除き南北方向に築かれたものである。住居跡と溝との関係はよく分からないが、少なくとも４つの住居跡はこれら溝に囲まれるように存在している。なお、東西方向に走る１条の溝はやや時期が下る可能性をもつている。

出土遺物では、近世以降と考えられる１溝から、近・現代の遺物が多量に出土した。磁器の特徴などから近世中頃以降のものが主体である。他に、縄文土器や古代以前の須恵器・土師器も多く含まれていて、この溝が造られた際には前時代の遺構及び包含層が破壊されているとみられる。事実、出土遺物の大部分が摩滅しており接合するということもほとんどなかった。なお、特徴的なものとして、古銭や泥メンコも多く見つかった。

他に特徴ある出土物としては、墨書土器がある。細片のためはっきりしないが、皿の底部に文字が書かれているものと考えられる。

最後となったが、今回の調査では、第４層と名付けた白色粘土層の存在が顕著であった。この白色粘土は今回の調査区では全域に堆積しているものと考えられるが、その堆積状況は一定しないようで、概して調査区の南側にいくほど厚い傾向にあった。古代の溝や住居跡群がこの白色粘土層上面で検出されること、また下層より縄文時代の晩期の土器が出土することから、時期幅は広いものの、その間の堆積のものと捉えられる。 なお、当層には遺物を含まず、その性質はきめ細やかである。これまでの大江遺跡群の調査でも同様の層が見つかっている調査地点があるということだが、普遍的に存在しているかどうかはまだよく分からない状況にある。その生成についても白川による堆積物との見方もあるが、詳細はよく分かっていない。

写 真 図 版

図版1

図版2

図版3

図版4

図版5

図版6

図版7

図版8

図版9

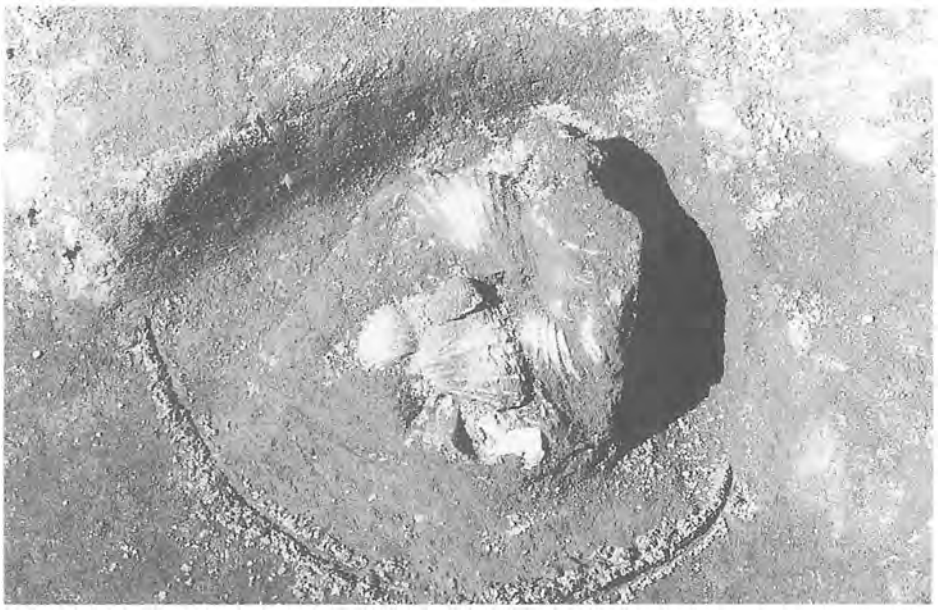
図版10

図版11

図版12

図版13

図版14



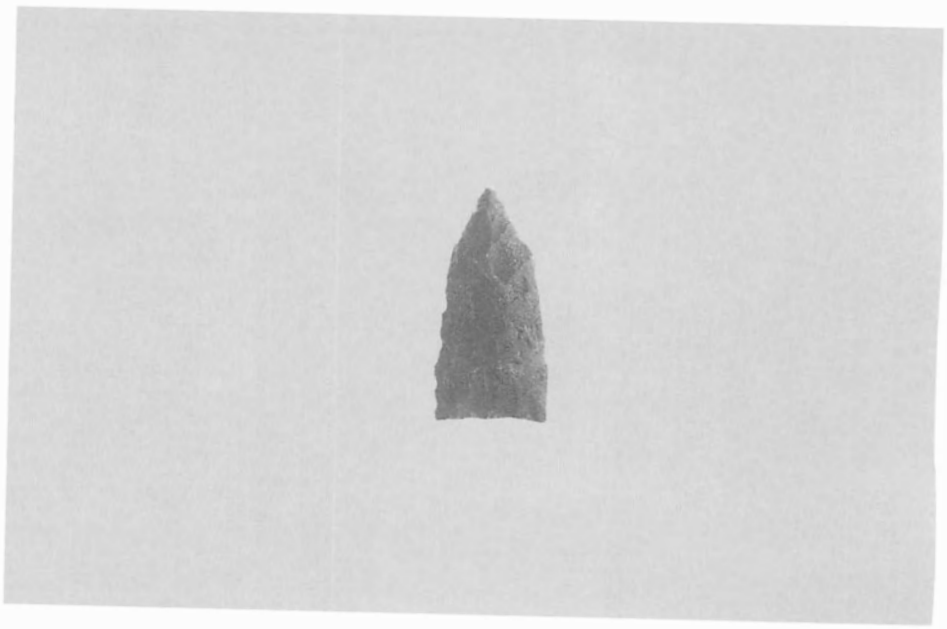
図版15

図版16

図版17

図版18

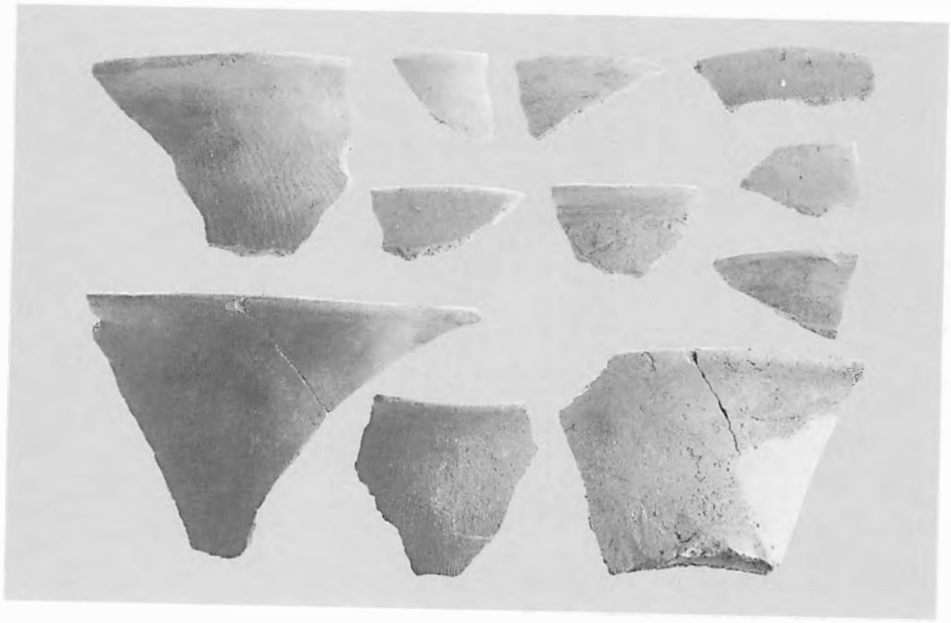
図版19



図版20

図版21

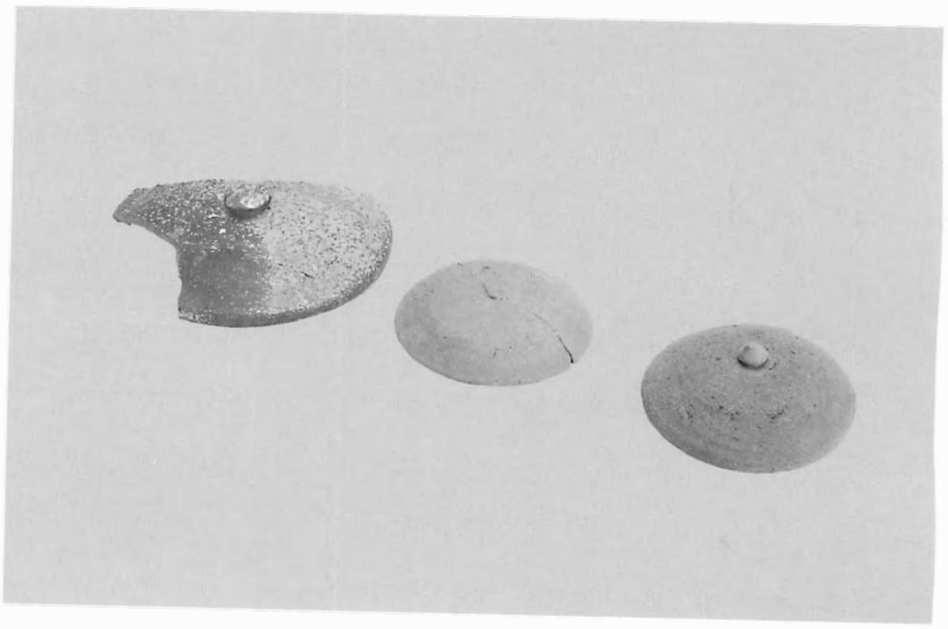
図版22



図版23

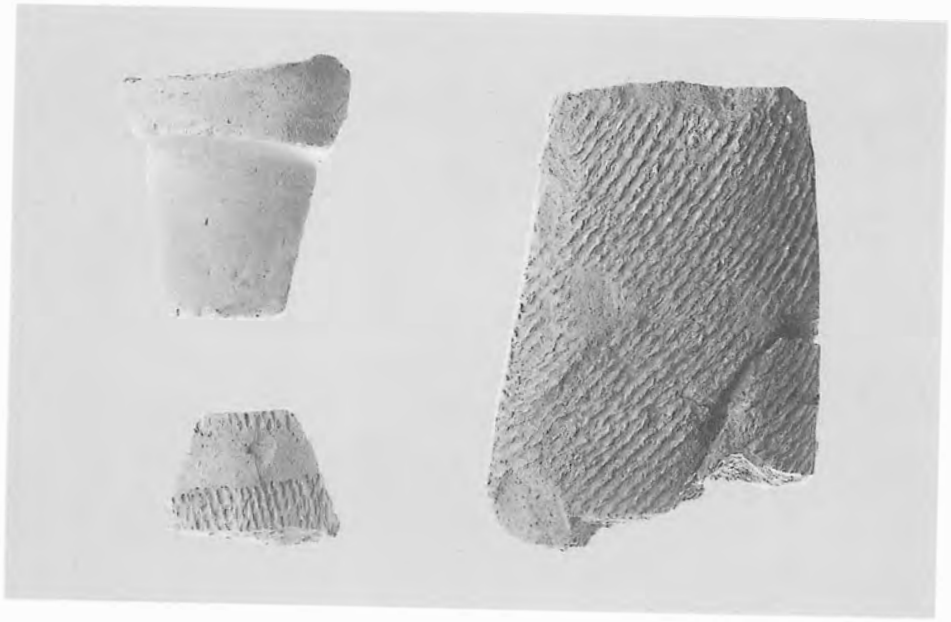
図版24

図版25

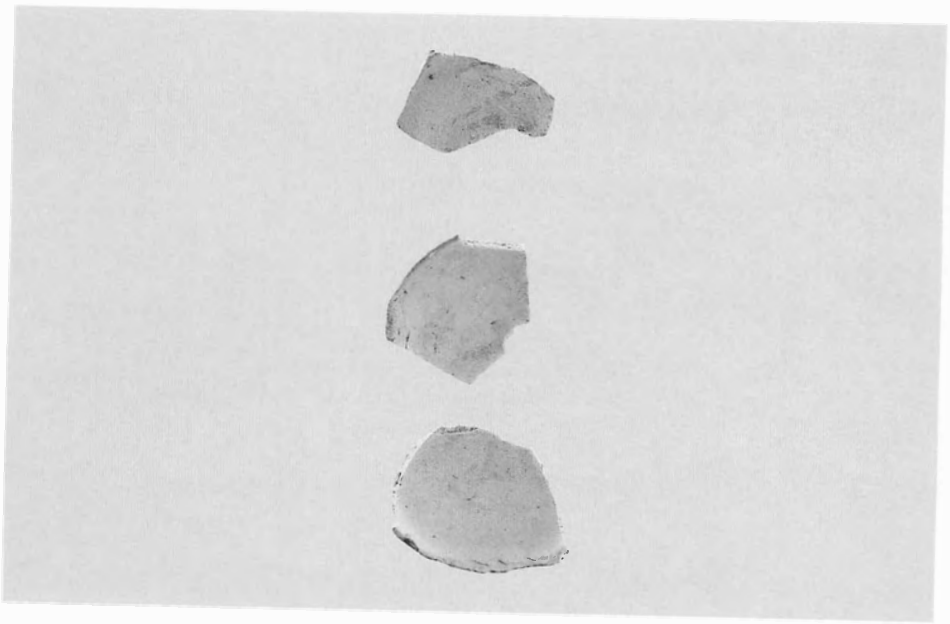


図版26

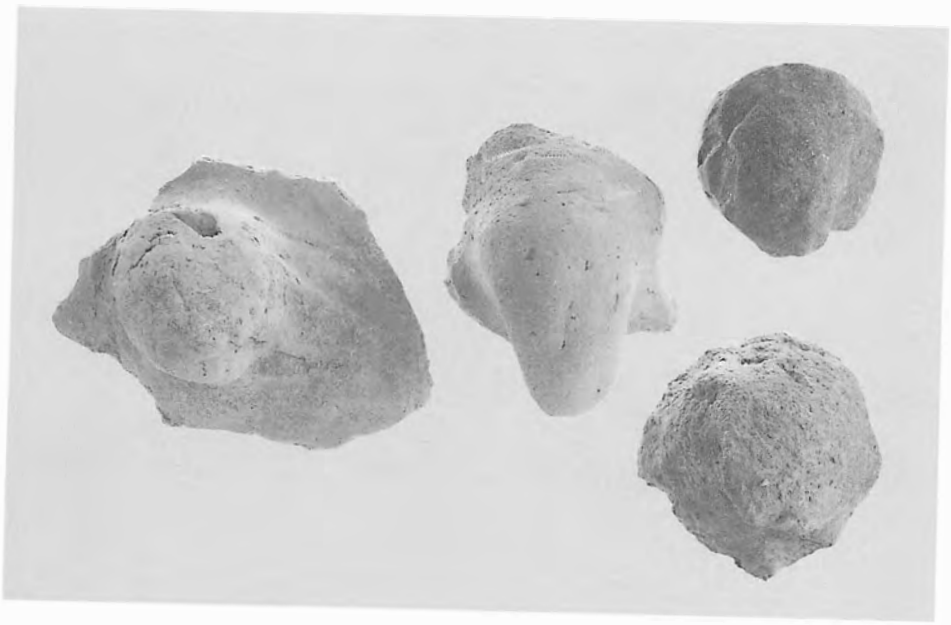
図版27



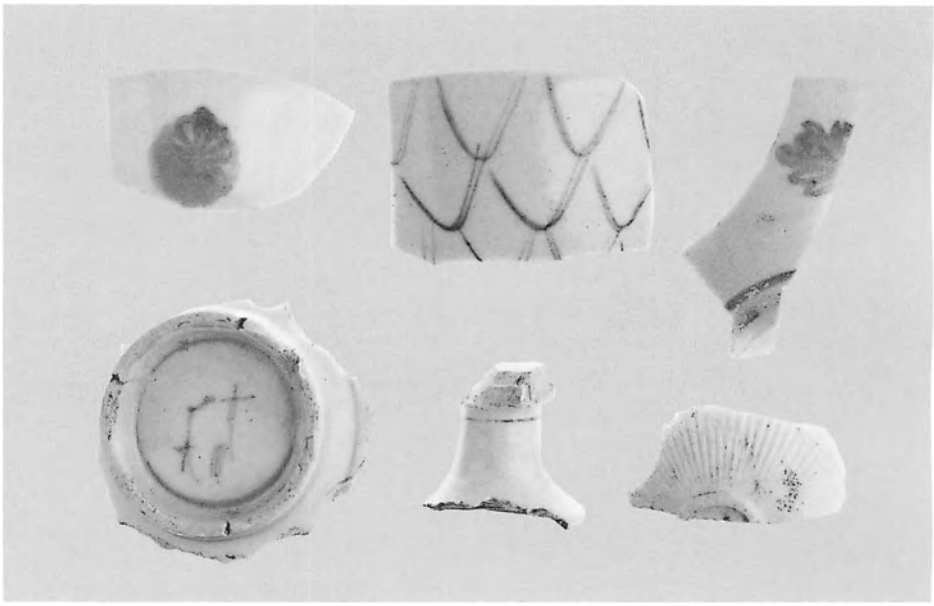
図版28



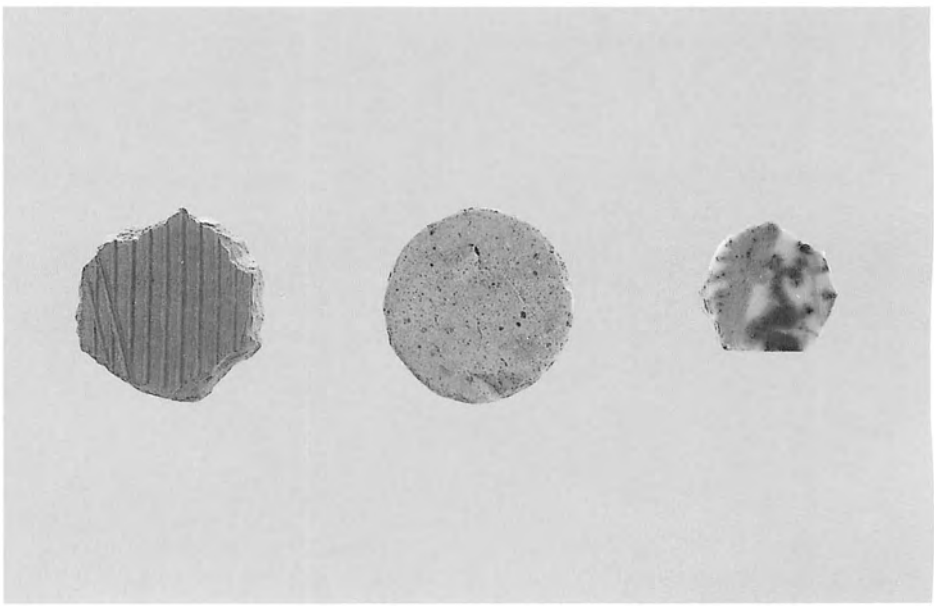
図版29



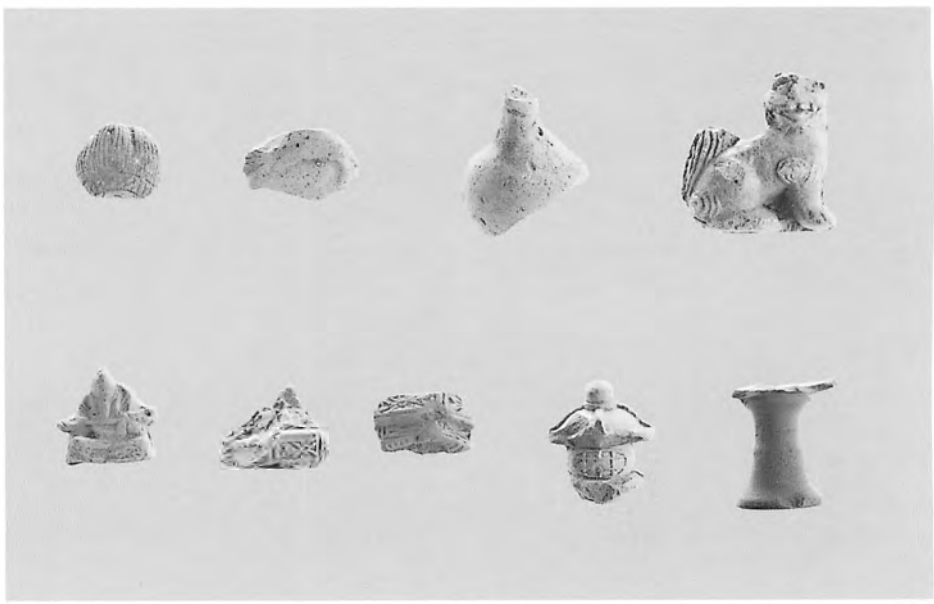
図版30



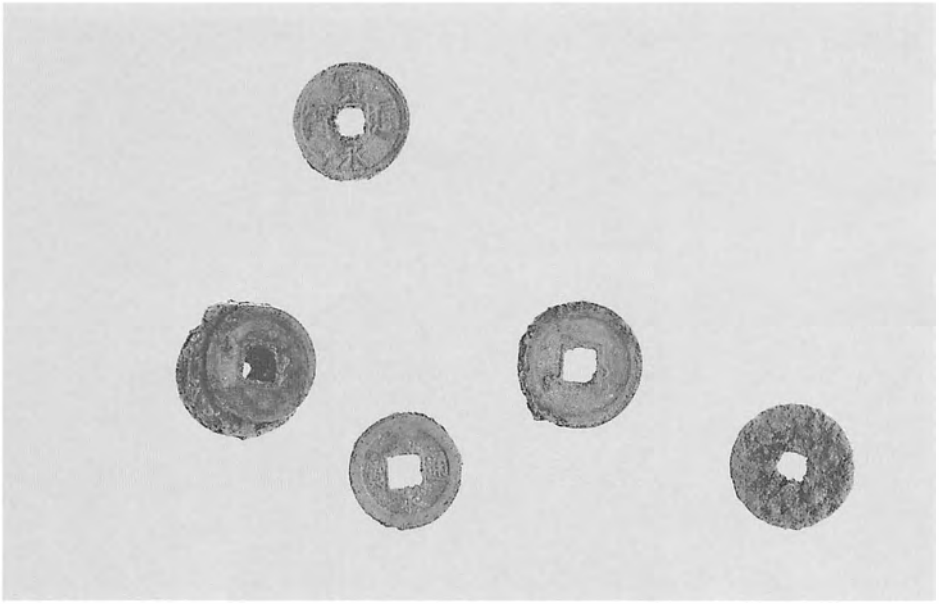
図版31



図版32



図版33



図版34

図版35

図版 36

図版 37

図版 38

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおえいせきぐん
書　名	大江遺跡群
副書名	
巻　次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第211集
編著者名	木村　元浩
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609　熊本市水前寺6丁目18番1号　　TEL 096-383-1111
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおえいせきぐん 大江遺跡群	くまもとしおおえ 熊本市大江4丁目9番	熊本市	283			200111 -200202	1,900㎡	県営住宅 建て替え

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大江遺跡群		縄文時代		土器・石鏃・剥片	
		平安時代	住居跡 溝 土抗 柱穴	土器	
		近世から現代	溝	陶器・磁器・古銭（寛永通寶） 泥メンコ	

熊本県文化財調査報告書　第211集

大江遺跡群

平成15年3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行 〒862-0950　熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 敷島印刷株式会社
〒861-4101　熊本市近見3丁目12-3

14	教委	教文
② 010		

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 211 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：大江遺跡群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日